



公益社団法人日本環境教育フォーラム

清里ミーティング2014

報告書

日 時：2014年11月15日(土)～17日(月)
会 場：公益財団法人キープ協会 清泉寮
山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
主 催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
後 援：環境省、文部科学省、林野庁
山梨県、日本環境教育学会
協 賛：アサヒビール株式会社
J-POWER 電源開発株式会社
損害保険ジャパン日本興亜株式会社
公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団
日能研
参加者：186名



公益社団法人日本環境教育フォーラム
清里ミーティング 2014

目 次

開催趣意	1
スケジュール	2
清里ミーティング これまでの実績	3
1 日目 開会式 ・ 全体会 1	
開会式	11
全体会 1	
キーノートスピーチ	12
ワールドカフェ方式・ディスカッション	16
2 日目 3 時間ワークショップ	17
全体会 2	
2-1 「ESD の 10 年後の環境教育」	39
2-2 「清里ユースミーティング～YOUは何しに清里へ?～」...	41
オプションプログラム	
環境教育プレゼンテーション	43
早朝ワークショップ	49
当日募集ワークショップ	50
3 日目 全体会 3 ・ 閉会式	54

開催趣意

今年で通算28回目となる「公益社団法人日本環境教育フォーラム清里ミーティング2014」今年は11月15日(土)～17日(月)の3日間にわたり、公益財団法人キープ協会清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを会場に開催した。

このミーティングは、主に以下の2点を全体のテーマとしている。

1. 参加者同士のネットワークの構築
2. それぞれの環境教育活動を再確認し、理念や意識を共有する場

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育がある。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切である。

そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人(または団体)がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要である。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPO など環境教育の現場で働く人々同士のつながり＝ネットワークを大切にし、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えている。

そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、本ミーティングを開催している。

清里ミーティングの特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であること。

どんなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体でつくり上げていくという性格を持っていること。

今年の特徴

2014年のメインテーマは、「ESDの10年後の環境教育」

国連「持続可能な開発のための教育の10年」の最終年である今年、清里ミーティングの直前の11月に、ユネスコと日本の共催により、名古屋市及び岡山市において「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」が開催された。

今回の清里ミーティングでは、全体会をはじめ、環境教育プレゼンテーションや3時間ワークショップ、予習講座：ESD入門などでもESDに関連する話題提供・ディスカッションが複数展開された。

全体会1の中では、第1部で「ESD ユネスコ世界会議を終えて」というテーマで、関係者から基調報告をいただき、第2部で「私とESD」として、ワールドカフェ方式で参加者同士のディスカッションを行った。

また、全体会2では、初めて会場を2つに分けて実施した。全体会2-1では、「ESDの10年(2005～2014)後の環境教育」というテーマで、初日の全体会1で行った基調報告やディスカッションを受けて、ESDに関連する事を深めていく場として、ESDの10年に深くかかわってきた方からの事例紹介と、参加者それぞれの10年のふりかえりとを踏まえて、今後のESDの展望を考えた。全体会2-2では、日本環境教育フォーラムの若手職員・学生部が中心となり、若手世代で交流を深めモチベーションや問題意識の共有の場としてユースミーティングを開催した。

スケジュール

●1日目：11月15日（土）

10:30～	受付開始
11:00～11:30	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画（自由参加）
12:00～12:40	清里ミーティング予習講座：ESD入門（事前申込制）
13:00～15:30	開会式 全体会1 <ul style="list-style-type: none">●キーノートスピーチ●全体会<ul style="list-style-type: none">第1部：基調報告 テーマ【ESD ユネスコ世界会議を終えて】第2部：ワールドカフェ方式・ディスカッション テーマ【私とESD】
15:20～16:05	休憩・チェックイン
16:05～18:10	環境教育プレゼンテーション
18:15～20:05	夕食・休憩
20:05～20:50	環境教育プレゼンテーション
21:05～	情報交換会 <ul style="list-style-type: none">●「人と組織の紹介処（コンシェルジュデスク）」開設●人材・仕事探しのお手伝い「oh！人事、oh！人事」コーナー開設

●2日目：11月16日（日）

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ（自由参加）
7:30～ 9:00	朝食・移動
9:00～12:00	3時間ワークショップ 午前の部
12:00～13:30	休憩・昼食・移動
13:30～16:30	3時間ワークショップ 午後の部
16:30～17:00	移動
17:00～18:30	全体会2 <ul style="list-style-type: none">2-1 「ESDの10年後の環境教育」2-2 「清里ユースミーティング～YOUは何しに清里へ？～」
18:30～20:30	夕食・休憩
20:30～	情報交換会 <ul style="list-style-type: none">●「人と組織の紹介処（コンシェルジュデスク）」開設●人材・仕事探しのお手伝い「oh！人事、oh！人事」コーナー開設

●3日目：11月17日（月）

7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	チェックアウト
9:00～11:30	当日募集ワークショップ
11:30～11:45	移動
11:45～12:40	全体会3・閉会式「全員参加型 ディスカッション」
12:45～13:45	さよならパーティ
14:00	解散 <ul style="list-style-type: none">●オプション企画「清泉寮ペレットボイラー見学ツアー」（14:00～15:00）●オプション企画「地域開拓の原点・清里歴史ガイドツアー」（14:00～15:00）

「清里ミーティング」これまでの実績

第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】①環境教育について（考え方とその論理）
 - ②自然観察の中に今後とりこんでいきたいもの
 - ③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
 - ④施設運営とコーディネーターの在り方について
 - ⑤自然観察の有料化について
 - ⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子（小池しげんの子）

第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／山梨県
- 【分科会】

前半	①学校と環境教育	後半	①地域・開発と環境教育
	②地域社会と環境教育		②施設と環境教育
	③施設と環境教育		③人づくりと環境教育
	④自然観察と環境教育		④市民・行政・企業・学校の協力
	⑤企業と環境教育		⑤環境教育の目的と方法
			⑥学校と環境教育
			⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ（元ヨセミテ国立公園管理事務所長）

第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①小中高における環境教育カリキュラム
 - ②若い世代に楽しいプログラムとは
 - ③環境教育をうまく経営していくためには
 - ④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
 - ⑤環境教育で村おこしができるか
 - ⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ（元マリン・ディスカバリーズ専務理事）

第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校教育
 - ②事業化
 - ③プログラム
 - ④人づくり
 - ⑤施設
 - ⑥地域開発・村おこし

※この年4月より上記6つの研究部会が発足。

- ゲスト：ジョセフ・コーネル（ネイチャーゲーム考案者）

第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校
 - ②事業化
 - ③プログラム
 - ④人づくり
 - ⑤施設
 - ⑥地域社会
- ゲスト：スティーブン・メドレー（ヨセミテ・アソシエーション会長）

*1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足

*1992年7月 「日本型環境教育の提案」発刊

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【紹介WS】①エコツアー報告・ヨセミテ自然学校
 - ②New School of Conservationにおける環境教育
 - ③ペンギンリザーブ活動報告
 - ④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
 - ⑤フィールドミュージアムごっこ
 - ⑥環境教育国際セミナーに参加して
 - ⑦成城学園における「散歩」「遊び」
- 【体験WS】①さあ、みんなでやってみよう！開発教育シミュレーション
 - ②エコロジーキャンプつまみぐいハイク
 - ③ネイチャーゲーム入門
 - ④もしフィールドでけがをしたら
 - ⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】①学校での環境教育
 - ②地域に根ざした環境教育
 - ③エコツーリズムの可能性とその問題点
 - ④環境教育のプログラム教材開発
 - ⑤指導者養成について
 - ⑥エコマネジメントのしかた

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム
 - ②死の準備教育の試み
 - ③マインドクロッキー
 - ④パートナーシップへの挑戦
 - ⑤究極の自然観察会
 - ⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】①プログラム
 - ②施設
 - ③学校
 - ④人づくり
 - ⑤企業
 - ⑥地域・自治体
 - ⑦エコツーリズム
 - ⑧海外の国立公園情報
- ゲスト：アン・ロベッタ（ストーリーテラー）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム
 - ②ファイブ・トリック
 - ③森の宝箱をつくろう
 - ④地球救出作戦
 - ⑤枯れ木に花を咲かせましょう
 - ⑥清里・冬物語
- 【分科会】①企業
 - ②エコツーリズム
 - ③都市環境教育
 - ④ネイチャートレイル
 - ⑤自然学校
 - ⑥ネイチャーライティング
 - ⑦フォーラム塾
- ゲスト：ジョン・エルダー（ミドルベリー大学英語学・環境学教授）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①自然学校としての施設づくり
 - ②行政・自然学校
 - ③自然学校の経営を考える
 - ④自然学校の人材育成
 - ⑤自然学校のプログラム
- 【WS】①写真で環境教育
 - ②あなたにとって出会いとは何ですか
 - ③環境教育を企画・プロデュースする
 - ④ソフトクリーム姉ちゃんをねえ！
 - ⑤未知なる可能性を求めて
 - ⑥キープ・フォレスターズ・スクールズのプログラム体験
 - ⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
 - ⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は？
 - ⑨アース・アート
 - ⑩メディアワークショップ

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算 10 回)

■日時：1996年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：174人

■主催：日本環境教育フォーラム

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】
- ①自然学校の「事業化」
 - ②自然学校でのプログラム
 - ③地域振興と環境教育
 - ④環境保全活動がそのまま環境教育
 - ⑤エコツーリズムの様々な可能性
 - ⑥JEEFの法人化など今後の可能性

【ワークショップ】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②ネイチャーエクスポアリング
- ③清里での川の環境教育を考える
- ④「子供であそぼう」についての御紹介
- ⑤元気がでる自然観察
- ⑥環境教育の本質を考える
- ⑦環境教育を企画・プロデュースする
- ⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
- ⑨自然をテーマにしたスライドショー
- ⑩自分への気づきと NGO
- ⑪清里インターネット通信社へようこそ
- ⑫森だくさんの自然体験
- ⑬まちを遊ぼう
- ⑭未知なる可能性を求めて
- ⑮エコビレッジを作ろう
- ⑯アクティビティの“パクリとアレンジやローカライズ”

※1997年4月 環境庁主管の法人格を取得、

社団法人日本環境教育フォーラム設立

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算 11 回)

■日時：1997年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：170人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】
- ①環境教育の指導者養成
 - ②環境教育の新しいプログラム開発
 - ③環境教育とまちづくり
 - ④環境教育の情報の発掘と提供
 - ⑤企業や行政とどのように組むのか？
 - ⑥新しい交流集会のスタイル

【WS】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②自然と心・心とひとのコミュニケーション
- ③環境教育の服装計画を考える
- ④出たところ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
- ⑤環境教育を企画プロデュースする
- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インターネットサインをつくらう
- ⑧ディーブエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくらう！
- ⑯野外における企業研修の実際とその可能性

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算 12 回)

■日時：1998年11月14日(土)～16日(月)

■参加人数：176人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】
- ①公共事業における環境教育の役割
 - ②森林・里山における環境教育と地域振興
 - ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入
 - ④動物と関わる環境教育
 - ⑤日本型エコツーリズムについて
 - ⑥メディアと環境、その先にあるもの

【ワークショップ】

- ①環境教育個人商店を考える
- ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
- ③21世紀のインターネットを求めて
- ④おきらく やまんぼの部屋
- ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
- ⑥エコマネーのすすめ
- ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
- ⑧ネイチャーエクスポアリング
- ⑨エコスピリチュアルワークの試み
- ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
- ⑪これまでの50年とこれからの50年
- ⑫川を設計してみよう
- ⑬「おもい」を「かたち」にはじめの一步
- ⑭自然学校でめしが喰えるか

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算 13 回)

■テーマ：「学ぶ心・育つ力」

■日時：1999年11月13日(土)～15日(月)

■参加人数：185人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】
- ①自然学校の運営を考える
 - ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ
 - ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり
 - ④森から見つめる川と海
 - ⑤エコツーリズム一歩前へ
 - ⑥見つめよう地域の里山、伝えよう里山の魅力
 - ⑦チルデンを越える！
 - ⑧教育を考える

【早朝 WS】

- ①カラスのきもち
- ②朝のティータイム
- ③きもちとキモチをつないだら
- ④五感で感じよう清里の自然
- ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算 14 回)

■テーマ：「原点を見つめよう」

■日時：2000年11月11日(土)～20日(月)

■参加人数：171人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

【体験 PRG】

- ①野外での救急法を覚えよう
- ②ネイチャーウォッチング in 清里
- ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
- ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
- ⑤竹を使ったものづくり
- ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
- ⑦自分という自然に出会う
- ⑧Frog (カエル)
- ⑨プロジェクト・アドベンチャー

- 【分科会】 ①自然体験活動における体験学習法
②ゆったり楽しむ ノスタルジーワーク
③虫を知る・入門
④「センス・オブ・ワンダー」って何だ？
⑤学校ビオトープの可能性
⑥五感を使って楽しみながら自然探検
⑦環境教育とスピリチュアリティ
⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
⑨自然学校のPR活動を考える
⑩Out of Treasure Boxes
⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
⑬表現を楽しもう！「シアターゲーム」

- 【早朝 WS】 ①野遊び手遊び発見隊
②センス・オブ・ワンダーの体験
③地球と私の合作づくり “1枚の葉”
④見て、聴いて、感じて…朝の森でネイチャーゲーム
⑤早朝ジョギングワークショップ
⑥キモチときもちをつないだら

■スライドプレゼンテーション

■JEEF 理事による3分トーク

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算15回)

■日時：2001年11月17日(土)～19日(月)

■参加人数：192人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/農林水産省/林野庁/山梨県

- 【体験 PRG】 ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
②初心者歓迎！清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
③秋の味覚を楽しもう！
④「ほっ♪」となるたき火講座
⑤身体感覚講座
⑥The Bear (ひぐまの生き方、暮らし方)
⑦プロジェクト・アドベンチャー
⑧やまねミュージアムへ行く

【分科会】

- ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きもの)に関連するもの」を活用する
②「いまだき」の子ども・「いまだき」の親 改造計画！
③博覧会を環境教育という視点から評価する
④ゆったり過ごすやまねば流ネイチャーワーク
⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
⑥朝からイキナリ！若者で語ろう！の会
⑦小さな子どものための環境教育の“技”をさぐる
⑧地域の昔話を中心にした環境教育
⑨農業と林業を語ろう！農業者と林業者と語る環境教育
⑩Environmental Education in English
⑪北九州博、きらら博で行われた環境教育プログラムはこれだ！
⑫テロ・戦争に関してわかちあう
⑬環境教育基礎講座
⑭GEMSの体験プログラム
⑮自然学校で働くこと
⑯センス・オブ・ワンダー
⑰ネイチャーエクスプロアリングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
⑱田んぼから生まれる日本型環境教育

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ

②早朝ジョギングワークショップ

■スライドプレゼンテーション

■参加者による3分トーク「ここが変だよ！環境教育」

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算16回)

■テーマ：「胎動」

■日時：2002年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：182人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

■環境教育ミニレクチャー

■ヨハネスブルグ・サミット報告

■参加者による3分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!？」

【ワークショップ】

- ①地域通貨ってなんだらう？
②折り紙を使った環境教育の試み(3)
③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
④環境問題、エコロジカルアートからの試み
⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
⑥体験主義を超えて…プロジェクト・ワイルドの世界
⑦「自然の中で働く男性はオバチャン度が高い??？」を証明したい!!
⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
⑨ひよこのキモチ
⑩モアイは何を見たか
⑪Environmental Education in English
⑫持続可能な開発と環境教育
⑬森の交響サイン計画づくり
⑭サロンの語り場

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②清里ミニガイドツアーA

③清里ミニガイドツアーB

④モンゴル茶で朝を迎えよう

⑤清里ミニガイドツアーC

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2003(通算17回)

■キーワード：持続可能な開発のための教育

■日時：2003年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：208人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・科学と環境教育をつなぐミーティング(前夜祭)の報告
- ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律
- ・持続可能な開発のための教育(ESD)
- ・スライド&トーク オオロニの日々

【WS&体験 PRG】

- ①ワラっていいとも
②社会教育ゲーム体験プログラム 投資意志決定ゲーム Chemical
③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試みHAM
④総合学習へのNPO参画が期待されているけど、実現が難しいのは何故？
⑤エコ・ネイションゲーム
⑥忙しい!!! けど前向きに レベルアップシートを作ろう
⑦科学するココロを育てよう!
⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試みPM
⑨野生生物教育の現状と課題
⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう!
⑪「持続可能な人」づくり
⑫開府400年! 江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
⑬どうなる? どうする? 日本環境教育フォーラムの未来
⑭子育てという環境
⑮地方発! 食農発信!
⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう!

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダー

②清里ミニガイドツアー 富士山とせせらぎの小径コース

③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2004(通算 18回)

- キーワード：「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前
- 日時：2004年11月13日(土)～15日(月)
- 参加人数：187人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前
- ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

- ①エコツーリズムという生き方
- ②科学と環境教育
- ③地場産小麦でパンをつくろう！
- ④環境立国 エコ・ネイションゲーム
- ⑤「センス・オブ・ワンダーからグリーンコンシューマーへ」
～第1回清里「エコ商品コンテスト」～
- ⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験
- ⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)
- ⑧自然学校の動きと人材養成
- ⑨環境教育 in 国際協力 最前線！
- ⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」
- ⑪酵母を育てて、パンを作ろう！
～酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり～
- ⑫石器時代に接近！モノはこうして作る ～シエラカップ～
- ⑬いのちを伝える自然体験 ～自分流健康な生きかたを学ぶ～
- ⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)
- ⑯「1億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

パーム油のはなし ～開発教育入門講座～

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい
- ③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド**■JEEF 公開理事対談****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2005(通算 19回)**

- キーワード：「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会作りに具体的にどのように役に立ってきたのか」

- 日時：2005年11月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：221人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会：基調講演、5分間スピーチ、パネルディスカッション**【WS&体験 PRG】**

- ①環境教育基礎講座(午前の部)
- ②自然学校って何だ？
- ③学校教育と環境教育
- ④ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑤ひとりひとりの感性で自然を感じとろう
～ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら～
- ⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証
～セルフガイドシートの評価軸を作ろう～
- ⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう！
～低学年向けの GEMS プログラムを通して～
- ⑧森林療法
- ⑨プロジェクトWE T 体験会(午前の部)
- ⑩環境教育基礎講座(午後の部)
- ⑪自然学校の評価に向けた人材養成
- ⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る
- ⑬CSR と環境教育
- ⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは、・・・
- ⑮里山で音楽会

- ⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法！ ～過去からの環境の変化を辿る～
- ⑰プロジェクトWE T 体験会(午後の部)
- ⑱科学と環境教育 見直そう！あなたのインタープリテーション
～持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために～

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②座禅&ヨガ
- ③清里ミニガイドツアー

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド**■JEEF 活動報告****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2006(通算 20回)**

- 日時：2006年11月18日(土)～20日(月)
- 参加人数：224人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会「日本の環境教育 この20年を振り返る」基調講演**■学長鼎談「大学と環境教育」****【WS&体験 PRG】**

- ①自然学校を事業化する ～20年間に自然学校は何を獲得したのか～
- ②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える
- ③あなたにとって食育ってなに？
- ④環境教育基礎講座
- ⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
- ⑥学びとコミュニケーション ～GEMS プログラムの体験を通して～
- ⑦ESDの実践のポイントを探る ～みんなで話せばわかってくる!?～
- ⑧森林環境教育のすすめ ～木が好きになるプログラム～
- ⑨50分プレゼンテーション(午前の部)
- ⑩企業とNPOとの協働を考える戦略会議
- ⑪環境教育とESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る
- ⑫環境教育と地産づくり
- ⑬環境教育仕事塾
- ⑭行政との連携を考える
- ⑮大鼓で太古に逆行するぞ！
- ⑯木から樹を知る方法 ～木材をIPにいかす～
- ⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくろう
- ⑱50分プレゼンテーション(午後の部)
- ⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す
科学的知識の伝え方

⑳感性?科学?どちらのインタープリテーションショー**【早朝 WS】**

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②環境質問 ～答えのない問題～
- ③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか
- ④清里ミニガイドツアー
- ⑤清泉寮 朝さんぽ

■環境ショート映像作品上映会**■今後の戦略会議****■スライドプレゼンテーション****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2007(通算 21回)**

- 日時：2007年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：230人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■省庁プレゼンテーション**■全体会：「生物多様性」基調講演**

- ・第3次生物多様性国家戦略が目指すもの
- ・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

- ①「生物多様性」の見つけ方・伝え方
～自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法～
- ②行政との協働を考える
- ③学ぶ環境としてのコミュニケーション ～GEMS とゴードンメソッド～

- ④食育コミュニティをつくろう!
- ⑤どこでもインタープリテーション! ~グッズ展開型 IP~
- ⑥関西発! これからは日本的でいいこう!!
- ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
スピード・ソリューション~自然学校版~
- ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑨ツリークライミング? 樹上の世界から学ぶこと
- ⑩50分プレゼンテーション
- ⑪企業と環境NPOとの協働を進める戦略会議
- ⑫ESDを広める人のための「ESD入門講座」
- ⑬環境教育基礎講座
- ⑭生物多様性と環境教育について
- ⑮科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ
~ヤマネのプログラム体験を通じて~
- ⑯メディアと自然学校
- ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
- ⑱体験型展示物を評価しよう
- ⑲エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ!
- ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
- ㉑やってみよう!! 体感ツリークライミング㉑の世界
- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩
③清里ミニガイドツアー
- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2008(通算 22 回)

- 日時: 2008年11月15日(土)~17日(月)
- 参加人数: 192人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会: 「日本型環境教育の知恵 出版記念」~日本型環境教育とは~
- 【ワークショップ】
- ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
- ②生き物との共生について ~どんな共生があるのか~
- ③環境教育&ESDを”広げる×深める”政策を考えよう
- ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ!
- ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
- ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
- ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
- ⑩企業のための環境NPOカタログ編集会議
- ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
- ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
- ⑬オオバコずもうで勝つ方法! 理学系研究室の自然体験
- ⑭川遊びのルールを広めよう
- ⑮日本型、日本的を考える ~日本の自然観という視点~
- ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
- ⑰障害者と共につむく環境教育の企画をつくる!
- ⑱森づくりのための戦略会議 ~行政・企業・NPOの協働~
- 【早朝 WS】 ①砂鉄から鉄を作ろう! 柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③清里の森で生物発見
④ロシアから渡ってきた鳥と出会しましょう
⑤清里ミニガイドツアー
- 環境教育プレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2009(通算 23 回)

- テーマ: 「生物多様性」~環境教育の役割~
- 日時: 2009年11月14日(土)~16日(月)
- 参加人数: 193人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性」とは何か? 行政・企業・NGO から
 - ・事例紹介「生物多様性 私はいこう伝える」
 - ・全体ディスカッション
- 【ワークショップ】
- ①自然体験型環境教育基礎講座
- ②多様な生物の声を聴く~全生命の集いワークショップ~
- ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
- ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ! Part2
- ⑥風が吹けば罌粟屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑦パーマカルチャーと環境教育
- ⑧幼児~小2に伝える生物多様性 ~生物多様性の形を探る~
- ⑨ビジターセンターを運営側から考え創る方法
- ⑩あなたにとって、生物多様性って何?
- ⑪生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
- ⑫人間界に多様性は確保されているか
- ⑬日本の森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑭どうプログラム化しよう? 自然学校の「エネルギー」
- ⑮風が吹けば罌粟屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑯日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑰エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
- ⑱事故防止~注意を促すだけでいいの? 実践的予防安全法
- ⑳トランジションタウンとは何か? 都留での試み
- (注) ㉑川遊びを始めよう! ~川の安全管理トレーニング~ は、都合により中止
- 【早朝 WS】 ①生物多様性を映像で感じよう ~いっしょに生きる道~
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③ゼロからの火おこし術
- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

※2010年6月 公益社団法人への移行認定を取得、
公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

(公)社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2010(通算 24 回)

- テーマ: 「いのちをつなぐ環境教育」
- 日時: 2010年11月13日(土)~15日(月)
- 参加人数: 177人
- 主催: 公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性条約第10回締約国会議の結果」
 - ・提案「生物多様性保全に果たす ESD の取組について」
 - ・提案「What is CEPA??」
 - ・取組紹介「環境省における ESD の取組について」
 - ・全体ディスカッション
- 【ワークショップ】
- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②日本の自然観から考える環境教育
- ③農的暮らしの学校
- ④自然感を耕す: 人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
- ⑤生物多様性まんだらカードゲーム体験会
- ⑥生物多様性条約のCEPAって何だ?
- ⑦企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える

- ⑧エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3
- ⑩「サステナビリティ」の基本はこれだ! ※
- ⑪これだけは知っておきたい! 生物多様性の基礎知識 ※
- ⑫生物多様性を普及する環境教育を目指して
- ⑬森を考える～木質バイオマスで100年先の森づくり～
- ⑭大学生のための食育プログラム
- ⑮命をいただく～ニワトリと生きる～
- ⑯エコロジカル・シンキングゲーム
- ⑰「地球交響曲第7番」を見て、みんなで語ろう!
- ⑱イナカとこどもと日本の未来を考える
- ⑲企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

※の印は、主催者企画ワークショップ

(注) ⑨海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止

- 【早朝 WS】
- ①バードコールハイク
 - ②多様性を感じる観察会
 - ③ゼロからの火おこし術
 - ④朝飯前の手仕事
 - ⑤朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
 - ⑥生き方を学ぶ自然観察
 - ⑦ノルディックウォークで早朝散歩
 - ⑧映画「西の魔女が死んだ」おばあちゃんのお家ツアー
 - ⑨みみをすませば～みんなで作るいのちのものがたり～

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

【公社】日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2011(通算 25回)

- テーマ: 「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」
- 日時: 2011年11月19日(土)～21日(月)
- 参加人数: 188人
- 主催: 公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 財団法人キープ協会清泉寮
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/経済産業省/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会 1
 - ・パネルディスカッション
 - 「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
 - ②企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL.2
 - ③質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ
 - ④農的暮らしの自然学校
 - ⑤森林療法にできること～森林セルフケアの可能性
 - ⑥里山応援ネットワークを作ろう! ワークショップ
 - ⑦0から仕事を作る～体験からチームを作る～
 - ⑧『ワールドカフェ～自分発! 未来をかえる価値観考～』
 - ⑨修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～
 - ⑩震災救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方 ※
 - ⑪ESD×CSR: サステナビリティ教育指針を体感! ※
 - ⑫やったらできた! エネルギー系企業と弱小NPOのコラボ
 - ⑬環境と文化・歴史・科学 etc.の複合…「旧暦」入門
 - ⑭自然感を耕す 自分と里山里水が元気になるワーク
 - ⑮生物多様性まんだらカードゲーム 今年小学生版
 - ⑯PLT, WILD, WETの日本での可能性を考えよう
 - ⑰日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
 - ⑱原発と環境教育～思ったことを話すことからはじめよう～
 - ⑲狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～
- ※の印は主催者企画ワークショップ

- 【早朝 WS】
- ①ゼロから始める火起こし術
 - ②森林療法的プログラム体験～樹林気功と運動療法
 - ③冬鳥と出会う、いのちを感じる
 - ④キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【公社】日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2012(通算 26回)

- テーマ: 「アジアの一員として、日本が今できること」
～think global actlocal: 『リオ+20』の年に考える～」
- 日時: 2012年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数: 177人
- 主催: 公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 公益財団法人キープ協会清泉寮
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会 「アジアの一員として、日本が今できること」
～think global actlocal: 『リオ+20』の年に考える～」
 - ・基調講演「リオ+20の概要と、NGOの成果と課題」
 - ・パネルディスカッション
 - 「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育入門講座
- ②自然学校人事担当養成講座～ほしい人材を育てよう～
- ③実施無し
- ④プーさんの森をデザインしよう!
- ⑤考えよう! 伝えよう! 森の”いのち”の知恵と力
- ⑥食から考える価値と暮らし
- ⑦ねん土をつかって、超ミニアースオープンをつくろう!
- ⑧農村と若者～そと者、若者による農山村の活性化～
- ⑨一次産業と社会貢献事業～金の切れ目が本気のはじまり
- ⑩「住み開き」を考えよう ～身近に環境教育の場をつくる～
- ⑪「都市と自然の融合 ～両方見て、初めて見える環境教育!～」
- ⑫木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及をめざして～①
- ⑬地域に根ざすということについて PBE への招待
- ⑭田舎で生きる! ライフモデル作りワークショップ
- ⑮パタゴニアから学ぶ! 持続可能な働き方と歩み方
- ⑯環境教育×植物療法～自然の恵みをヒトの力に～
- ⑰都市型環境教育 小学生向け紫外線プログラム体験
- ⑱文学から見た農的暮らしの可能性
- ⑲理想のシゴト? 自然学校職員の本音と未来像
- ⑳身近な環境の総合的「明察」…内なる「マイ暦」を作ろう!
- ㉑農が X を助け、X が農を助ける～半農半 NPO でいこう～
- ㉒エコとエネのつながりを考えるカードゲームワークショップ
- ㉓森で教える国語・算数・理科・社会をつくっちゃおう!
- ㉔木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及へ向けて～②

【早朝 WS】

- ①科学と環境教育プログラム「静岡のなりたち」
- ②みどりとともだちに! 泥んこ遊び de 苔玉作り
- ③キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2013(通算 27回)

- 日時：2013年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：204人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：公益財団法人キープ協会清泉寮
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会

■全体会

- ・キーノートスピーチ
- ・ワールドカフェ方式ディスカッション
- ・「環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く」

【ワークショップ】

- ①自分の仕事を創る技術～IPの新しい可能性を考える～
- ②地域に根ざした環境教育 Place-Based-Education
- ③モミでご飯をたこう！～空き缶で「ミニかまど」づくり～
- ④宇宙船地球号体感インプリ：20世紀天文少年の誘い
- ⑤環境教育をカードゲームで考えてみよう～エネルギー編
- ⑥「原発事故のはなし3」デモとディスカッション
- ⑦質的データ分析(QDA)を体験してみよう
- ⑧企業とNGOの幸せな関係をながく続ける秘訣
- ⑨楽器を使ったプレゼンテーションを考えよう
- ⑩知っておきたい基礎知識～命・自然・地球・宇宙～
- ⑪日常の現場や暮らしに持ち帰る“運営と振り返り”
- ⑫持続可能な地域のための必要なしくみを考えよう
- ⑬継承したい日本の自然観～自然体という生き方～
- ⑭事例から学ぶESD(持続発展教育)の基本と実践
- ⑮ゲームで生態系を学ぼう！
- ⑯ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術～
- ⑰パフォーマンス評価の世界の潮流
- ⑱15年のノウハウ伝授！身近な素材でプログラムづくり
- ⑲小学校で環境教育やりたい人 集まれ！
- ⑳伝える技術KP法(紙芝居プレゼンテーション法)

【早朝WS】

- ・2日目：11月17日(日)
 - ①アイソン彗星いつ観るか…清里、澄んだ空…今でしょ！
 - ②ロシアからの旅人に会おう
 - ③清里トレラン
- ・3日目：11月18日(月)
 - ①ポール・ラッシュ記念館 特別ツアー

【特別企画】

- ・アクアマリンふくしま移動水族館

【自主企画】

- ・プレゼンテーションで世界を変える！～TEDの世界～
- ・野外フェスは環境教育のツールになりえるか！？
- ・スマホ、テレビゲームの年齢制限でも考えてみよう
- ・JEEF 理事バンド(バンド演奏)

■環境教育プレゼンテーション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

1 日目

開会式・全体会 1

開会式 司 会：(公社)日本環境教育フォーラム理事長 川嶋 直
主催者挨拶：(公社)日本環境教育フォーラム会長 岡田 康彦

全体会 1 進 行：(公社)日本環境教育フォーラム理事長 川嶋 直

第 1 部 キーノートスピーチ

テーマ：「ESD ユネスコ世界会議を終えて」

1. 鈴木 義光（環境省 総合環境政策局環境教育推進室 室長）
2. 新海 洋子（ESD-J 東海エリア担当理事、
環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー）
3. 阿部 治（ESD-J 代表理事、JEEF 専務理事、日本環境教育学会会長）

第 2 部 ワールドカフェ方式・ディスカッション

テーマ：「私と ESD」

（敬称略）

開会式

主催者挨拶

(公社)日本環境教育フォーラム会長 岡田 康彦

主催者を代表し、公益社団法人日本環境教育フォーラム会長の岡田より挨拶を行った。

清里まで多くの方に参加いただいたことへの感謝を始めに述べた。また、今年も初めての参加が多いことも話をし、初めての方へは、収穫を得るために意欲に燃えていると思うが、プログラムを消化するのはもちろん、それだけでなく、先輩たちを捕まえて議論をするなど、より多くの関わりを持って議論してみることも重要であると述べた。有意義に使っていただいて3日間になるよう、サポートもしていきたいと述べた。



1 日目 全体会 1

第 1 部 基調報告 テーマ「ESD ユネスコ世界会議を終えて」

＜コーディネーター＞ 川嶋 直(公社)日本環境教育フォーラム 理事長)

ESD の 10 年の締めくくりの今年、清里ミーティング直前に行われた岡山と名古屋での「ESD ユネスコ世界会議」を受け、第 1 部として関係者より各 15 分ずつの基調報告を頂いた。世界会議が終わったばかりでまとめる時間もないままに掛けつけて頂いた 3 名へは、基調報告への準備をせず、感じたことをそのままお伝え頂くようお願いし、参加者自身が ESD とどうつながっているのかを考える時間と位置付けた。

キーノートスピーチ 1

鈴木 義光 氏 (環境省総合環境政策局環境教育推進室 室長)

ユネスコ世界会議のフォローアップ会合で話したことをここで報告する。

初めに、環境省前・副大臣の北川知克氏が懇談会を設けたこと。ESD の 10 年が終わった後の展開を考えるために学識経験者を呼び、1 月から 7 月まで合計 5 回議論を行った。今、何が課題となっているのか、何が不足しているのか、それに対して今後どのような進め方をしていくのかといった点を議論し、8 月に懇談会の報告書をまとめた。その報告書は既にホームページに掲載している。

日本国内での ESD の認知度は非常に低く、理解がされていない。内閣府のアンケート調査において、今回岡山でユネスコの世界会議が開催されているということ、94%の人が知らないと回答。ESD について中身も含めて知らない人が非常に多く、知っている人はごく少数という結果が出た。

懇談会の三本柱の 1 つ目は「人材育成」。ESD を教えることのできる人材を育てていかないと ESD は広がっていかないため、人材をどんどん育てるために予算を確保しながらやっというところになった。

2 つ目は「教材開発」。学校教育の中で小学生から大学生まで同じ教科書を使っているというわけではないので、問題の相違に合わせて教材を作らないといけない。

日本にはたくさんの公立、私立の図書館があり、どこにどのような教材や本があるかは国立国会図書館の検索システムを使うと、ある程度わかるようになっている。また、各図書館で備え付けのパンフレット類があるが、これらは一元集約化されていない。デジタル化によってパンフレット類も一元化できればということで、今、検討をしているところである。

3 つ目は「連携支援体制の整備 (ネットワークの構築)」。ESD の取り組みを幅広く展開していくためには、様々な主体間の連携ネットワークというのが必要になる。各地域で、いろいろな団体が様々な工夫をして活動していることだろうと思う。そういった団体にとって、横の連絡を取りながら、お互いの良いところを吸収し、ネットワークを構築していくということは非常に重要である。また、自分を知るためにたくさんの方の様々な話を聞くことも非常に重要だと思っている。しかし、現段階で十分にそれが行われているのかというと、必ずしもそうではない。



懇談会の結果もふまえ、平成 27 年度の概算要求では、ESD に関する予算として 1 億 3 千万円ほどを新規要求している。

この予算要求の内訳は三本柱を中心に編成されており、1 つ目の「人材育成」に関しては、教職員を対象とした環境活動のリーダー養成研修会、ESD の指導者の育成、コーディネーターの養成などに充てている。

2 つ目の「教材開発」は、各主体が有する ESD の情報の集約、現場のニーズに即した教材やプログラムの開発、習熟度やニーズに適したものを容易に入手できる仕組みなどを構築しようと考えている。

3 つ目の「連携支援体制の整備 (ネットワークの構築)」に関しては、全国ネットワークを構築する。具体的には環境教育の相談・支援の窓口業務が出来る、地域間をつなぐ役割を担う拠点となる事務局の経費として考えて予算要求した。

それから、今後 ESD の普及啓発が非常に重要な観点になるので、広く ESD を知ってもらうために、これからは様々な手法を使って普及啓発を推し進めていくということ。

その中で今年新たに展開したものが 2 つほどあり、1 つは写真で自分の思いを伝える「ESD フォトコミュニケーションアワード 2014」。ESD の国際会議が開催される直前、各賞の決定と表彰を行った。結果についてはホームページをご参照願う。

もう 1 つが、自由俳句。伊藤園の「お〜い お茶」のボトルに俳句が載っているが、そこに環境省の ESD に関する俳句を載せていただいた。環境大臣賞をはじめ、「未来とは来るものじゃなくて作るもの」等載っている。これで少しでも ESD の認知度が広がると非常にありがたい。

実は石原前・環境大臣に対して記者会見前の説明に行った際に『ESD とは何だ。こんなことを言っているから伝わらないのだ。違う言葉を考えろ。』と言われたが、ESD は関係省庁連絡会議で決めたことであり、私が勝手に変えるわけにはいかない。事務次官が『ESD とは早く言えば環境教育です。』と説明すると『わかった、じゃあ今日の記者会見は環境教育で行く。』という経緯があり、記者会見では『ESD は環境教育です。』という説明を行った。我々は組織人なので、ESD は環境教育と言われれば環境教育で、それは通さないとはいけないと思っている。今後の普及啓発を、文部科学省をはじめ各所と協力をしながら進めていきたいと思っている。

最後に私の非常に嬉しかったことを紹介する。

「ESD は2030年どようになっているか」というテーマで、ユネスコスクール代表のベルナードさんという高校生が話していた、「世界を変えたいと思うだけでは駄目だ、それを変えないとならない。変える、変えられるという気持ちを持たなければならない。」というメッセージと、質疑応答の中で発した「親も教員も自分の師であると考えてはならない。親はガイドであり友人であるべき。押し付けるのが親であってはならない。親たちが成果を選ぶ時、基準がお金であってはならない。」という言葉、高校生がこんな凄いことをよく言えたなと感心した。

キーノートスピーチ2 新海 洋子 氏 (ESD-J 東海エリア担当理事、 環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー)

清里に初めて来たのは20年前、26歳の時。環境教育で食べていくと心に決めて、川嶋さんを訪ねたことを思い出した。今は環境省中部環境パートナーシップオフィス及びESD-J理事と紹介していただいたが、「私はNGO職員である」という魂を売ったことは一度もない。今は環境省の施設に在籍して、環境省にNGOの思いを届けるべく日々頑張っている。

私は幼少期から母と共に平和運動・人権運動・貧困問題に関わっており、今もNGOに関わっている。ESDについては、自分の学びを多く子どもたちに提供したい一心で活動しているので、2005年から10年間何があっても絶対に関わり続けると、強い意志でやってきた。

皆さんに伝えたい事は3点。

1つ目は10年の成果について。10年の成果を一言で言い表すのは難しいが、「GAP:ユネスコのESDに関するグローバル・アクション・プログラム」が世界会議で採択された。GAPの中には5つの重要な優先順位があるが、全てを話す事は出来ないで、そのうちの1つ、私が採択されて良かったと感じたものについて紹介する。

私は長年NGOで活動してきた。そのNGOでは、社会教育と子どものための教育を行ってきたが、限界を感じた。実施しているプログラムには、親がすでに興味関心がある場合や、リピーターなど、ある程度決まった子ども達しか来ない。それでは広がりには欠けると思い、学校の義務教育課程にプログラムを導入できないかとの考えで環境省の施設に入った。文科省とのパイプを作りたいというのがEPOに入ったきっかけ。そこで学校の先生を訪ね、教育委員会を訪ね、時間はかかったが、先生や教育委員会とのパイプができた。GAPで採択された内容の“教育者”の箇所を見ると、「これからの教育者は、ESDのための学習ファシリテーターになるよう、教育者やトレーナー、その他変革を進める人の能力を強化する」と書いてある。もはやティーチングではない、教員は教えるだけの存在ではない。ファシリテーションする存在だと書かれている。これは凄い事である。

昨日、名張市の先生方に「これからの先生は、ティーチャーではなくファシリテーターです。」と話したところ、「何となく分かります。教えても子ども達に響かない。子ども達の目がキラキラ輝く授業を作るためには、自分は引き出す人にならなくてはならない、子ども達の可能性を引き出す人にならなくてはならないと感じていた。」と先生も気が付いていた。その事がGAPで採択された。NGOは、一緒に子ども達の目がキラキラする教育・ファシリテーション出来るような素材を提供する存在になっていく。



2つ目。最近日本にユネスコスクールが増えている。ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章前文に「ユネスコスクールは子どもの心に平和の砦を作る教育」と書いてある。つまり日本全国でユネスコスクールに登録された学校が、子ども達の心に平和の砦を築いている。日本全国のユネスコスクールの先生たちが集まって作った宣言があるので紹介する。

私と、あなた、学校のみならず、地域のみならず、世界のみならずとつながっていく。
だから、私は、見えないあなたと励まし合い、支え合える存在であるという尊さに気づき、何か行動したくなる。
教室から校庭へ、校庭から地域へ、地域から私の国へ、私の国からあなたの国へ、そして世界へ、地球へ、私の世界は広がっていく。
だから、私は、どこにもかけがえのない宝が息づいていることに気づき、何か行動したくなる。
今と、過去とのつながり、明日とのつながり、遠い未来とのつながり。
今の私は過去や未来とつながっていく。
だから、私は、この大きな時間の流れのなかで、たいせつな責任を負っていることに気づき、何か行動したくなる。

まだ少数ではあるが、教員がこういう言葉を発するようになった。20年前、私が環境教育で食べていくと言った時には、教員は見向きもしなかった。それがやっとなら、コラボレーションして子ども達の未来に向かって一緒に学びを作っていくと言う。それがESDであり今回の世界会議の成果だと思っている。

3つ目。「ESD あいち・なごや子ども会議」の開催地という事で、7月に愛知・名古屋の小学校5・6年生と中学校1年～3年生の約130人が集まった。気候変動エネルギー、生物多様性・陸、生物多様性・海、防災、文化、の5つのチームに分かれて、フィールドワークやヒアリングを行った。さらに、JICA に行つてウガンダの給食を食べ、世界には学びが十分に与えられない子ども達や、十分な食事が受けられない子ども達がいることを学んだ。グループワークは5回実施した。

私は「ESD あいち・なごや子ども会議」のスピーチは絶対大人には作らせないと、心に決めてファシリテーターに話し、大学の先生にもその事を伝えた。最後の仕上げは大人が手伝うが、子どもが発した言葉でつなく宣言にしたいと思つてのことだった。かつてCOPの時に、最後は大人が宣言を作つてしまつて子ども達に不満が残つた経験があるので、今回は避けようと思つた。

今日はその子ども達のスピーチを紹介する。関わつた子ども達全員が会場に来ることはできなかったのも、横断幕も使つてスピーチをした。横断幕には「私たちがESDの主人公」と書かれていて、これも子ども達が宣言の中で書いたキーワードである。子ども達のメッセージを読み上げる。

「ESD あいち・なごや子ども会議からのメッセージ」

私たちが考える「持続可能な社会」は、「未来を考え、お互いを思いやり、人間だけでなくすべての生き物が共に、幸せに生きる社会」です。差別も不安もなく、平和で安全に、楽しく生活できる社会にしたいです。

しかし、今、私たちが生きている社会は、資源やエネルギーを無駄づかいし、自然環境を破壊しています。世界のどこかで戦争がおこっています。地域の伝統文化を伝えることが難しくなっています。防災対策をしている人が限られています。

たくさん問題があつて、「持続可能な社会」とは言えません。そして、こういった問題は、すべて、人とつながつていことがわかりました。

「持続可能な社会」づくりを難しくしているのは、

- ・とどまる事を知らぬ人間の欲、自分勝手さ、わがままな気持ち
- ・人々の意識や関心が低く、知識が少ないことなのです。

いろいろな問題の原因をつくつていのは人間ですが、それを解決していくのも人間です。

「持続可能な社会」をつくるために、私たちは、次のことを実行します。

- ・まだ知らないことがあるので、もっと現状を学びます。調べ、考え、参加します。
- ・たくさんの人に知ってもらふ必要があるため、ESDを学校や地域の人に伝えます。
- ・身近に出来ることは提案し、行動し、実行します。
- ・命を大切に、人と人とのつながりを深め、交流します。

ここで、子ども会議から、大人のみなさんに次のことを提案します。

- ・戦争をしないでください。武力で解決しないでください。
- ・世界の人々が協力して、どの国の人も教育が受けられる環境をつくつてください。
- ・子ども会議のような、学び、考え、話せる場をもつてつくつてください。大人もESDに興味を持って参加してください。
- ・知識も経験もある大人が、現状や未来に伝えたいことをもつて私たちに教えてください。

- ・多くの人にESDを広めてください。ESDの考え方を広めて、今ある法律を変えてください。
- ・地域の人たちともつと交流してください。
- ・未来に目を向けて考えてください。当たり前のことを大切にしたいです。子どもができて大人にできないわけがないと思います。

子ども会議の私たちが考える「ESD」とは、「未来を考えて、行動すること」です。みんながESDの主人公となつて、今、これから、未来に向かつて、ESDに取り組んでいきます。私たちは本気です。大人のみなさんも、本気になつてESDに取り組んでください。ESDは、この世界の未来にとって一番大切なものなのですから。

この会議に参加した子どもの中には、学校に戻つてから校長先生と交渉してお昼の時間にワークショップの報告をしたり、他の学校でどんな活動をしているかという報告をした子がいたという。子ども達が「実行します」と言っている。大人への提案もある。子ども会議はこの会議が終われば愛知県の子算が切れて終了し、子ども達は集まる事が出来ない。この事を見据えて彼らはもつとこういう場を作つて欲しいと提案した。

ある女性が会議の最後にメディテーション(瞑想)を提案し、目をつぶつて、2030年にどうなつているか想像し、どういふ世界にしたいか?を考えた。こうやつて世界の人たちの考えと私の考えが繋がつてい。世界の中ではまだまだマイノリティー(少数派)かもしれないけれど、「ESD」という言葉で繋がつて、未来を変えていかなければならない、自分に出来ることをしなければならぬと思つてい。これが3つ目に伝えたいことである。

昨日訪れた名張市の教育長は、名張市をESDコミュニティにすると言つた。

ユネスコスクールの宣言と同規約の内容を見て、より自信を持つたので、教育委員会が全面的に支援して、名張市全てをユネスコスクールにしたい。ユネスコスクールに留まらず、学校の先生の積極的な授業プランを応援したい。さらに世界のユネスコスクール、愛知・三重の他のユネスコスクールとも繋がり、教員も子どももパワーアップしたいので、どうか支援してください、とのことだった。

これが世界会議の1つの成果であり、これから私たちがやるべきことを教えてくれた。

私の最後の宣言は「私はこれからESDの仕掛け人で居続けたいと思つてい。どういふ仕掛けにするかは今日のミーティングで皆さんと議論しながら考えるが、これまでに無い仕掛けを作つて、さらにいろいろなことに関われるように、と思つてい。

キーノートスピーチ3 阿部 治 氏 (ESD-J 代表理事、JEEF 専務理事、日本環境教育学会会長)

ここでは「ESD の 10 年の成果」を共有したい。

国連「持続可能な開発のための教育の 10 年」の世界会議に 150 の国と地域から 76 名の関係級が集まり、クロードセッションだけで 1100 人以上、会場には数千人が集まった。

日本が「ESD」を提案した時、ESD という言葉はメジャーではなく、世界は期待していなかった。しかし今回の会合で各国代表者の発言を聞き、この 10 年間で ESD が主流化してきたと感じた。

10～20 年前「SD：持続可能な開発」を提起した地球サミットでは、生物多様性の保全、気候変動、それに伴う災害、内戦の頻発は差し迫った話ではなかった。しかし状況は変化し、SD を考えざるを得ない状況になった。環境のみならず、宗教や異なる価値観をもつ人々が互いに理解しあう世界を作るにはどうすべきか。

ESD とは、私達一人一人が社会の当事者・主人公として動き、様々な課題を解決し、日常的に且つ積極的に参加できる社会を作っていくことである。

しかし世界には、ESD をやりたくてもできない国がある。やりたいと思っても、お金がない、紛争に巻き込まれている。そういった国に対してどう寄り添い、一緒にやっていくのかを考えなければならない。

人類が地球上で生存するためには、持続可能な社会をつくらなければならない。持続可能な社会の実現のために、ESD を活かし、日常化していく必要がある。

今回の会議では、子どもだけではなく、若者が存在感を放っていた。名古屋での世界会議の前に岡山でユースフォーラムとユネスコスクールの世界大会があり、世界の若者が集まってきた。若者こそが、チェンジ・エージェントであり、是非この機会に輪を広げて「世界を変えていく力が私たちにはある」と示して欲しい。30 年後の世界をどうイメージして、具体化していくのか、そこでまさに若者はチェンジ・エージェントとなる。大人たちも一緒に進めようと考えている。

この世界会議に関連して、様々な行動宣言、あるいは提案が出た。企業として ESD を進めていきたいという企業の宣言が行われた。この 10 年間活動してきた様々な団体が提案をし、世界からの提案、若者の提案、高等教育の提案などが行われた。

あいち・なごや宣言は、今後 ESD をどう進めていくかという国際的な提案であり、国内で ESD に関わってきた私たちも色々な提案をしてきた。11 年前に ESD-J をつくり、ESD を日本に定着させて世界を変えていくために、この 10 年間の取り組みと提案をした。

ESD を具体化していくためのツールは手にしているので、あとは行動なのだ。

私たちが目指してきた環境教育、地域拠点、自然学校が、持続可能な地域再生・活性の最高の手段の一つということがわかってきた。まさに ESD による地域再生、地域創生。



日本の ESD の 10 年間の成果は、マルチステークホルダーが共に持続可能な未来をつくっていくために行動してきたこと。GAP：ユネスコの ESD に関するグローバル・アクション・プログラムは、政策的なコミットメント、包括的なアプローチ、地域、コミュニティをベースにした活動であり、日本の経験が活かされたものである。日本は 10 年間で世界に発信できる内容を作ってきた。

こういった成果を、日本国内に広げていくだけではなく、世界にもっと貢献していこうではないか。

そのためには、マルチステークホルダーによる ESD 推進のためのネットワーク、拠点をあらゆる地域に作り、繋いで支援していくデータセンターを作っていく。このことを環境省や文科省をはじめ関係省庁や議員に提案をしており、これからデータセンターを作るための話し合いを進めていく。今後この 10 年間の成果が試されることになる。

今日は紹介したいゲストが 3 名参加している。先ほどスピーチいただいたお二人に加えて、ESD 先進国として名前のあがる、スウェーデンからのゲスト。スウェーデンは環境の世界ルールを作った国であり、1972 年の国連人間環境会議はスウェーデンの提案で始まった。同国は持続可能な社会のビジョンを描いて活動しており、この後、16 時から新館のロビーで 30 分ほど時間を取ってもらったため、スウェーデンの ESD のお話をしよう。

若者、そして皆さんには、これから新しい道を作って欲しい。

第2部 ワールドカフェ方式・ディスカッション

全体会 1 第1部のテーマ「ESD ユネスコ世界会議を終えて」の関係者 3 名からの基調報告を受けて、ワールドカフェ方式で、「私とESD」というテーマについて、参加者全体で話し合った。

ワールドカフェとは、なるべく多くの人と話し合うことができ、その内容を多くの人が共有することができる、ディスカッションの方式である。

今回は、5～6名位1つの円形のテーブル（段ボール）を囲み、自己紹介から始まり、それぞれのトレンドキーワードについて、書き出し、話し合うという行程をテーブルのメンバーを変えて、3回実施した。座ったテーブルを離れる際には、自分の名前を書いているというルールにした。

1回のディスカッションごとに、テーブルを管理するテーブルマスターのみを残し、他の人は別のテーブルへ移動する。1回のディ

スカッションの時間は 20 分間とし、移動する際には出来るだけメンバーがバラバラになるようにした。新しい場所に着席したら、テーブルマスターの人は、着席した人へ 2～3 分でそれまでの対話の内容を伝える。3回目には誰も同じ人がいない席へ座る。最後には、最初こいたテーブルへ戻り、10分間程話した。内容は、テーブルマスターから、これまでのディスカッションの話をし、他の人たちは、他の席で聞いてきた内容を話す。

会場では、皆さんが、身振り手振りをしながら真剣に話す様子、隣の人と楽しそうに話をしている様子、深く傾きながら話に一生懸命耳を傾ける様子が見られた。最初は白かった記入用紙は、最終的には皆さんの持っているキーワードで埋め尽くされた。



2 日目

3 時間ワークショップ

【午前の部】

1. 自然の中で遊ぶゲーム
2. 再び、地域に根ざした環境教育 (PBE) について
3. 企業の ESD のあり姿/あるべき姿を考えよう
4. 「協働」による里山再生への取り組み ～〇〇×〇〇～
5. エネルギー大臣になろう ～ゲームで考える環境教育～
6. ウィルダネスファーストエイド ～仲間を守るその技術～
7. 楽器を使ってプレゼンテーションしよう
8. 語ろう！考えよう！「企業の ESD 宣言」
9. 電子絵本を活用した ESD プログラムを考える
10. 国連の新目標 (SDGs) は環境普及につながる？

【午後の部】

11. 体感、出航！宇宙船地球丸「苦手は天文」ぶっ飛ばせ
12. “自然学校と林業”環境教育は暮らし生業に直結せよ！
13. イノベーション創発型ワークショップのデザインを学ぶ
14. 清泉寮で自然音楽野外フェスティバルをつくる
15. 教育と刃物 ～ナイフを使う喜びを子どもたちに！
16. シニア自然大学を作ろう
17. 自己肯定感を育む ESD ～これからの学びへの提案～
18. GEMS の新しい使い方 ～森の中で 図書館の片隅で～
19. KP 法 (紙芝居プレゼンテーション法) の工夫共有ワークショップ
20. 小学校で環境教育をやろう！ Part II

(実施者名、敬称略)

自然の中で遊ぶゲーム

実施者：小川 かをり(早稲田大学)

【概要】

清里の自然を体験する方法の構築を目的として、ゲームの実践例を体験してもらった。Joseph Bharat Cornell の目的は自然の美しさ面白さを発見すること、自然や他者への共感力を高めること、自然環境への理解を深めること、命をいつくしむ感性を育てることにある。これを土台として参加者や環境に応じて応用したい。

(指針) ・自然と戯れる方法を増やす(小川)

- ・Sense Of Wonderこそ、自然保護運動の基礎となる大事な感覚である(R.カーソン)

活動の考え方ー以下の点で一致できればだれが考案してもいい

- ・人間は普段視覚から9割以上の情報を得ていると言われる。よってそれ以外の感覚(聴覚、触覚、味覚、嗅覚、第六感?)を使って自然を感じ取る経験をさせる
 - ・イメージを重視する。環境学の知識をもって感性で捉えなおす。絵本が手本
 - ・自然を一切傷つけずに楽しむ方法を身につける(ダックコール、たか笛、鹿笛、カラス笛、採取したら戻す、大声をあげない)
 - ・普段見慣れた自然でも違った視点で見るようにする。(地面に顔こすり付けるとか、落ち葉の中から外を覗き見るなど)
- どんな体験を目的とするか?
1. 視覚を排して五感で自然を味わう体験。自然との一体感を味わう体験。マインド・マップー音の世界をイメージする
肌の記憶ーあなたが抱いた木はどれだった?
 2. 自然を通して周りの人と結びつく体験
 - ・私とあなたのファインダーー私の感じた素敵な自然を受け取って！人間カメラ
 - ・ネイチャービンゴー見つけたお宝をシェアしよう
 - ・森の色合わせー色見本カードを携えてグループで散歩
色が近いものを見つけたらシェアし合う
 - ・落ち葉のカルターー落ち葉十色
野生動物の生活への理解を深める体験
 - ・落ち葉の中の世界ー毛虫になって林を感じる体験
 - ・ネコ科と狩人ー肉球のありがたみを感じ取る体験
 - ・私は誰？ーどう質問したら自分が誰だか当てられるのか？
 - ・洞窟のコウモリと虫ー見えない世界で獲物を捕まえるとはどういうものか
 - ・色いくつ？音いくつ？ー緑？青？同じ色なぞ二つとない。同じ音なぞ二つとない
 - ・俳句ハイクー俳句をひねりながら自然の中を歩く。これぞ日本古来のネイチャーゲーム？(カタツムリ 中で雨乞い 祈ってる)
(チューリップ 口をすぼめて チューしよう)

- ・目隠しトレイル、ナイトハイク、マイクロトレイル
ー普段と違った角度で自然を観察しよう

【実施内容】

1. 視覚を排し五感で自然を味わう・自然との一体感を味わう体験 なぜ視覚を排するのか？

我々は普段情報の9割は視覚から得ていると言われている。もし、我々が視覚を排したら、他の感覚がよみがえってくるのかもしれない。視覚では得られないものを感じ取るかもしれない。ここではゲームを通して体験した。

アメリカの人類学者カルロス・カスタネダはメキシコの呪術師ドン・ファンに学び、自然から「見ないで聴く」ことによって大事な何かを学び取れると教えられる。このやり取りの中でドン・ファンはこう言った。「西洋人は自然を見るときにじーっと目で見て観察しすぎる。それでは自然の大切な何かを感じ取ることはできない」と。カスタネダは2か月ドン・ファンについて修行し、その様子を本にまとめた。

「目から重荷を取り除くために耳をつかむにやいかん。われらは生まれた時から物事を判断するのに目を使ってきた。われらが他人や自分に話すのも主として見えるものについてだ。戦士はそれをしつとるから世界を聴くのさ。世界の音に聴き入るんだ。」(真崎義博訳『呪術の体験分離したリアリティ』二見書房。1973)

そしてカスタネダは、だんだんと音で世界を知るという経験を重ねる。風の速さを3種類と、4種類の鳥がここいらに居ることが分かったと言う。これがカスタネダの到達点。

GAME1. マインド・マップ「音の世界」音の世界をイメージする

GAME2. 「肌の記憶ーあなたが抱いた木はどれだったでしょう？」

2. 自然を通して周りの人と結びつく体験

自然について学ぶということは、その多様性を学ぶことでもある。人間も自然の一部と考えると、自然から他者への理解を学べる。



再び、地域に根ざした環境教育(PBE)について

実施者:大前 純一・水村 賢治(NPO 法人エコプラス)

【概要】

グローバル化が進むこの時代、日本では海外で活躍できる「グローバル人材」を育てるための教育が進められ、都市で暮らすための学びが中心となってきた。しかし、これからの持続可能な社会を考える際には、都市ではなく地域での暮らしについて学ぶことが環境教育にも必要ではないか。その解決策に繋がる「地域に根ざした教育」について改めて考えるワークショップであった。

【実施内容】

(1)はじめに ～アイスブレイキング～

初めに、円形に並んだ参加者がお題に沿って並び代わるアクティビティを行った。お題は年齢、清里までの所要時間から始まり、普段口にする米や水と自分の距離など、フードマイレージを考えるものや環境問題に関連するものに変化していき、自分の身近な環境についても意外を知らなかったことを気づかせていった。

(2)PBE について

まずは PBE の概念についてパワーポイントを使い説明した。PBE (Place Based Education)「地域に根ざした環境教育」の歴史と定義について説明した。

導入として「ふるさと」の歌を例にとり、その歌詞が若者に対して都市へ行けというメッセージが含まれていることをくみ取り、明治以来の学校教育が都市に向かうものであったと指摘し、現在も「グローバル人材」育成の名の下で、海外でカネを稼ぐための教育がメインストリームであると説明した。続いて「学ばば学ぶほど若者は土地から離れていく」という言葉を使い、学ばば学ぶほど若者は都市や海外に行き地域を離れてしまうという現状を指摘。途中、ミクロネシア大使館職員の「私たちが受けてきたアメリカ式の教育からは、自分たちの島に残る教育はされていない」というインタビュー動画を流し、「学び」とは一体何なのか、そもそも「学校」という概念は何なのかということについて考えた。「学び」とは日々の生活の中にあるもので、それこそがそれぞれの地域で暮らし続けるための「学び」ではないかと述べた。

参加者からは、学校という時間が制限されている環境の中での地域文化を学ぶことの難しさや、一旦地域を離れて都会へ行き学ぶことは、その知識を地域に戻った際に、他の人へ教えていかなければ悪いことではないのではという意見があった。

(3)ディスカッション①

参加者を4～5人に分けて20分×2タームのディスカッションを行った。各グループで地域に根ざした教育について各々思うことを話し合った。参加者同士がそれぞれ自分とは違う境遇の相手と話すことで、新たな気づきを発見できていたようだ。

参加者からは、地元の人にとっては当たり前のことが外から来た人にとっては魅力的であること、改めて本当の「豊かさ」について考える必要があるのではとの声が聞かれた。

(4)ディスカッション②

グループ替えをして再度ディスカッションを行った。1ターム目でのディスカッションで考えたことを新たなメンバーと共有し直し、新しい発見に繋げた。2ターム目では「生きていくためには屋根とご飯があれば良い」という結論に達したグループもあった。それさえあれば人は住み着くし、逆にそれが保障されないと帰る場所もなく新たなチャレンジもできない。日本の地域には食べるものはあるし、家もあるので大丈夫なのでは、という意見があった。

(5)まとめ

現代の教育の現状を考え直し、自分が育った地域の文化や生活にこそ学ぶべきことはあるのではないかと参加者全員で考えた。グローバル経済で落とされるお金を考えるのではなく、ある地域内で循環する経済を考えたり、都市と地方の関係性をより深くしていったりすることが、これからの持続可能な社会を築くために必要ではないか、と実施者が終わりに述べて終了した。



企業 ESD のあり姿／あるべき姿を考えよう

実施者：中村 敬(経団連自然保護協議会)

【概要】

企業が行う ESD 活動について、ESD は目的ではなく手段であること、語感のよさが先行してしまい言葉のみが一人歩きしがちであることの共通認識を得た後に、環境省の資料や法令解説などを用いて企業 ESD の現状、「あり姿」を把握した。

そして、向こう3年間の企業 ESD の「あるべき姿」について、求められる人物像、必要な要素、事業者求められること、の3つの視点を中心に参加者どうしで考えた。

単なる企業の事例研究ではなく、ESD に求められる環境問題の変化に応じて、企業 ESD も常にそれに追随していくことの重要性を自覚するために、企業 ESD の使命を原点に立ち返って考えられるワークショップであった。

【実施内容】

企業の環境普及啓発部門に関わる方や、NGO 職員、学生など、さまざまな方がこのワークショップに参加された。

企業の活動は、主に利潤追求と、法令遵守に起因する。そのため、今回のワークショップでは、まず、環境教育に関する各種法令の解説などを用いながら、企業の ESD 活動の「あり姿」を考えた。

イントロダクションにおいて、企業の ESD の目的について改めて議論するなかで、ESD の目標が見過ごされがちであり、手段が目的化されていること、イメージの良さのみが先行してしまい、現場の ESD に対する見識は低いということ、ESD の対象があやふやであること、環境教育との関係が不明瞭であることなど、現状の企業 ESD についての認識を共有した。

1つ目のワークでは、環境省がどのような意図で法律を作ったのか、環境省が法律を通して企業に何を求めているのかを、クイズを通して2つの小グループでそれぞれ考えた。

環境教育等促進法の基本方針には、「協働取組」の制度や、「未来を創る力」「環境保全のための力」を育むべきである、など、企業が環境教育を行う際の手引きともなる用語の解説が並んでいる。それぞれの用語が、どのような定義で使われているのかを、3 択のクイズを解きながら考えた。

例えば、環境教育にも求められる要素の一つとして、「自然体験、社会体験、生活体験など実体験を通じた様々な経験をする機会を設けること」や「地域を教材とし、より実践的に実感を持って学ぶこと」などの記述がある。参加者も、普段何気なく使っている言葉であっても、改めて定義しようとなると、意外と難しいようで、頭をひねって考えるような場面もあった。

このワークを通してわかったことは、環境省の企業 ESD に求めるものが、企業と社会の重要なインフラとしての人材育成であることである。

2つ目のワークでは、環境教育等促進法に基づく基本方針で述べられている「求められる人間像」、「環境教育に必要な要素」、「事業者を求める事」の3つの資料の黒塗り部分を考えるクイズを通して、抽象的に表現された「人材育成」について、企業が何を求められているのかを考えた。

このワークを通して、国が企業に要請している ESD 人材が概念的に分かってきた。例えば、企業は職場の社員だけでなく、家庭や学校、地域社会にも教育をおこなうことや、各職域の専門性を生かして、あらゆる場所で活用できる ESD プログラムの開発なども要請されているということがわかった。

これら2つのクイズ形式のワークを通して、企業 ESD の「あり姿」を把握した。

【まとめ】

2つのワークの後、これからの企業 ESD、とりわけ向こう3年間の企業 ESD にとって「必要な人材」「必要な要素」「求められるもの」について、グループでディスカッション、共有した。

人材については、「未来を想像し、課題を特定できる人材」「周囲を牽引し、リーダーシップの執れる人材」などが必要であるなどの意見が出た。

要素については、「論理的思考力に長けていること」「社会、経済、自然のそれぞれの環境についてバランスよく俯瞰できること」が必要であるなどが挙げられた。

求められるものとしては、「協働のためのネットワークづくり」や「ESD に対する真の理解」、「企業の ESD 活動を本業に生かしていく、本業の中に組み込んでいく」などの意見が挙げられた。

これからの企業の「あるべき姿」について、現状のよい点や問題点を踏まえ、参加者同士で活発に意見交換が行われた。



「協働」による里山再生への取り組み ～〇〇×〇〇～

実施者:大武 圭介・小原 賢二(ホールアース自然学校)
五十嵐 琢也(労働金庫連合会)

【概要】

里山の問題は複雑で、解決には様々な側面からのアプローチが必要であり、個人や組織の力をかけ合わせる「協働」が重要と考えられる。このワークショップでは、協働による可能性を話し合い、里山の問題解決に向けた取り組みをグループワークで考えた。

【実施内容】

1) 情報提供

「協同」の意義(だれかと一緒にやればできるかもしれない)と共に、今まで取り組んできた協同の事例(「自然学校×猟友会」「自然学校×木こり×デザイナー」など)が紹介された。同じ方向を向き、力を合わせられるパートナーかどうか重要であることも紹介された。

続いて、里山の問題解決に10年間取り組んできた「ろうきん森の学校」の活動紹介があった。労金の精神として「共助」の考え方があり「協同」に近い考え方があったことや、活動の事業化(自立)を重要視してきたことなども紹介された。

2) グループワーク

アイスブレイクの後、「里山の課題」について、参加者それぞれがテーマを出して共有した。近いテーマの参加者でグループを作り、解決策を議論し模造紙にまとめた。

3) テーマごとの発表と全体共有

・里山×資源×開発

人と物が流れる仕組み作りが重要。

猟師をモデルに「いのしかウオッチ」「猟師の月9ドラマ」「猟師の学校」など具体的なアイデアが出された。

・里山の荒廃をどう防ぐ？

まず里山のイメージや定義を共有することが重要ということで、里山の概念について共有。

そのうえで、公園化や木材利用など、里山の重要性を生み出すことが必要と話し合われた。

・里山に関する広報

SNS などに加え、近所のスーパーのレジ横など身近な広報手段について話し合われた。

リピーターの協力が重要との意見も出された。

・住と県産材

地域の活性化の為に、県産材の利用について話し合われた。

県産材の魅力を伝える森林ツアーやブランド化、企業の森の利活用についてアイデアが出された。

・小峰公園で何が出来る？

里山見本を目指す小峰公園をどのように計画するか話し合われた。

話題提供者からは「展望が見えてきた」との感想が出た。

【まとめ】

それぞれの活動フィールドや経験をもとに、新たな里山活動を協同でつくり出すことを目指し、活発な話し合いが行われた。

実施者からは、里山活動での閉塞感を打破するきっかけとしてアイデアを持ち帰ってほしいと呼びかけがされ、里山の問題解決は簡単ではないが助け合う関係を築いていこうと結んだ。



エネルギー大臣になろう ～ゲームで考える環境教育～

実施者：藤木 勇光・小西 金平・青山 千穂(J-POWER 電源開発(株))

古田 ゆかり・小寺 昭彦(サイエンスカクテル)

名取 優(明治大学)・阿部 和真(東京理科大学)

【概要】

このワークショップは、コミュニケーションをとりながらカードゲームを行うことで、エネルギーと環境のつながりについて学ぶきっかけ作りを行うものである。

1 チームをひとつの「国」と見立て、その国のエネルギー資源、経済、環境影響などのバランスを考えながら、暮らしを支えるエネルギーの安定供給を実現するための合意形成を行う。国の「政策」を決定し実行する過程から、エネルギー源の選択に主体的に関わることや、意思決定の際求められる要素を体験する。

【実施内容】

ゲームの流れと参加者の体験

1) 開議

1チーム4名程度のグループに分かれ、各グループが1枚ずつ「国カード」を引くことにより、その「国」の条件を決定する。「国カード」には経済力や資源条件、発電単価等が記されており、国の特徴が示されている。これを前提条件として、電気料金(経済性)・環境負荷・稼働率(安定性)・自給率の4つの要素の中から第1優先項目、第2優先項目を決めてそれを公約とし、公約達成を目指すとともに国民満足度の高さも競う。

2) 第1ターム

発電所カードには、水力、石炭火力、石油火力、ガス火力、原子力、風力、太陽光、ゴミ、バイオマス、地熱の10種類があり、それぞれの特徴を反映した発電単価、環境性能、設備稼働率、自給率の数字が記されている。それぞれの条件にもとづいて発電所カードの種類と枚数を選択することにより、発電所を「建設」する。これを通して、話し合い(開議)による合意形成(意思決定)を体験する。建設が終了すると、2つのアクシデントが発生する(アクシデントカードをひく)。

※アクシデントカード:各タームの終わりに引くカード。世界共通のものとその国独自の2つのアクシデントが発生し、発電所カードに影響を及ぼす。アクシデントの内容は、気候変動、地震、反対運動、戦争、政策変更、放射能事故、技術革新、資源開発など。

第1タームの建設とアクシデントカードの結果を加味し、4つの要素を計算し中間発表を行う。なお、計算はiPadを用いて行う。

3) 第2ターム

第1タームで生じたアクシデントを踏まえて、冒頭で掲げた公約を達成すべく、さらに発電所を増設する。そして、第1ターム同様に、建設後には2つのアクシデントが発生する。

4) 最終結果

電気料金、環境負荷、稼働率、自給率、国民満足度を算出したものに加え、合意形成の度合い(ゲームは、話し合いのもとに進められたか)も自己評価する。この結果を5段階で評価し、その合計値を他の国と比較して順位を決める。

5) 発表

各タームで建設した発電所や、アクシデントカード、最終結果の数値をまとめ、全体で結果を共有する。

6) 話し合いとまとめ

ゲームの体験を元に、エネルギー政策について考える際に必要なこと、合意形成で意識すべきことなどを話し合う。また、清里ミーティングという場の特性として、環境教育として展開する際の可能性や、小学生などを対象とする場合の留意点などについても話し合われた。

【まとめ】

エネルギーと聞くと難しそうに感じてしまうが、このワークショップはゲームでの話し合いを通して、楽しくエネルギーについて学ぶことができる。参加者の感想としても、「ゲーム性があることでエネルギーへの関心が低くても参加できる」「エネルギーについて考える“きっかけ”になる」「大人同士の対話のツールとして使える」等の感想を得ることが出来た。

発電方法には一長一短があり、リスクを分散させながら、国ごとの目標を決めて政策を考えること、疑問やジレンマを共有し、共に解決することなどを体験するという当初の目的を達成することができた。加えて参加者のゲーム参加に対する意欲も高く、様々な苦勞をしながら政策決定や発電所の建設に取り組んでいた姿が印象的であった。

今回のようにワークショップをきっかけとして、エネルギーを主体的に考える機会を積極的に提供していきたいと感じた。



ウィルダネスファーストエイド ～仲間を守るその技術～

実施者: 豊田 啓彰 (一社) ウィルダネスメディカルアソシエイツジャパン)

本杉 美記野 (公財) キープ協会)

【概要】

野外活動時に知人が怪我をした、または誰かに助けを求められたとき、あなたならどのような対応を取りますか？ そんな問いのもと、我々環境教育関係者は、果たして仲間を無事助けることができるのかということ、実際に体験も交えながら身をもって学ぶワークショップ。

【実施内容】

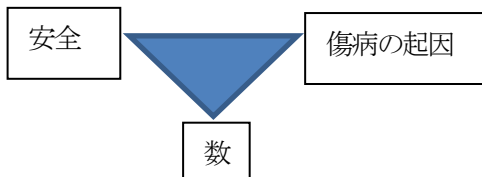
1) はじめに

「自然体験活動のフィールドワーク中に木に登っていた仲間が大きなドスンという音を上げて落下し、流血も見られ、呼吸も脈拍も上がっている」この状況下であなたならどんなことが気になるか？ どのような処置を考えるか？ ということを現状の知識や経験を基に3～4人のグループで考え、寸劇で発表してもらった。

2) 傷病者評価システム

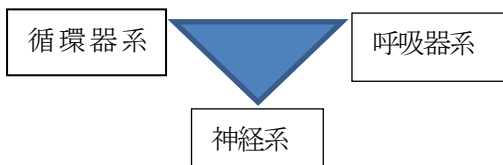
どのような順序で傷病者に接するかを示した三角形型の評価システムを基に1つ1つの条件を確認し、クリアしながら傷病者に対処していく。

(1) 現場の状況の評価と安定化



まず傷病者に接する前に上記3点を確認し、考える。

(2) 命に関する問題の評価と解決



ここで1つでもクリアできないものがあつたら、傷病者は目の前で命を落としてしまう可能性が考えられる。

(3) 情報を集めて本質的に問題を評価



SAMPLE

(S: 病状、A: アレルギー、M: 薬、
P: 関連のある病状、L: 最後に摂取したもの
・排泄、E: 起こったこと)

SAMPLEは、命をつなぐために聞いておくべきことの頭文字をとって作られたキーワード。目視だけや触って見ないとわからない隠れた痛みをチェックし傷病者の顔色を見ることが大切。

3) 模擬体験

実際に野外に出て、傷病者評価システムを基に処置を実践した。1回目は2日間遭難していた人に遭遇。空腹であるが彼は乳製品アレルギーで、救助者がミルクチョコレートを与えるとアナフィラキシーショックで死に至る可能性もある。「SAMPLE」の A: アレルギーに関して質問すれば防げるが、救助者役の多くはチョコレートを与えてしまう。アメリカで起こった事例で、実際に行ってみるとパニックになって冷静に考えるのは難しいというのが参加者の声であった。

2回目は呼吸・意識のない傷病者が斜面に倒れている場合。斜面で、リュックを背負っている状況で、どのように気道の確保と心臓マッサージを行うかという状況。斜面での救命措置でどのようにすればいいのか戸惑ったという参加者も多数見られた。

2つの状況での体験を通して、「座学では1つ1つ聞いてわかっていても実際にできないことが多かった。」「今までの講習は楽な場所での訓練だった」と、実際に野外で傷病者を目の前にしたときの処置の困難さ、自分自身のパニック度合いなどを身をもって痛感した。

【まとめ】

野外では救助者が傷病者に接する時間が長く、より複合的状況が起こりやすい。3つの三角形の各ピースを確認してから具体的な処置を行う方法は優先順位を明確にしてくれる。ウィルダネスファーストエイドでは「リアルな演技でリアルな対処をしてもらう」ことで実際の場面で冷静に対処し命をつないでほしいと話していた。



楽器を使ってプレゼンテーションしよう

実施者: 徳永 豊(スリーヒルズ・アソシエイツ)

浜本 奈岐(NPO 法人くすの木自然館)

【概要】

言葉によるものではなく、楽器や音の出るものを活用してメッセージを伝える、様々な表現を参加者同士で意見を出し合い編み出していくという体験型ワークショップ。表現する題材は、絵本のストーリー。絵本選びからストーリーに音を乗せていくまでの作業を参加者全員で行い、意思の疎通を図った。

【実施内容】

1) 楽器の準備

実施者は、多種多様な楽器を取り出し長机の上に並べ始めた。鈴やカスタネットなど馴染み深いものからアフリカ生まれの民族楽器カリンバ、「とんび」「カワセシ」などの鳥の名前が付けられた小さな木製の笛など目新しいものもあった。参加者は会場に入り、持ち寄った楽器を机に並べたり、互いの楽器を触ったり音を鳴らしたりしながら談話を始めた。作品作りには、楽器だけに限らず音が出るものは何でも活用してしまおうという実施者の提案から、会場内にあったビニール傘や段ボール、移動式バーベキューコンロといったものも用意した。

2) 題材となる本の選定と各自のテーマ紹介

次に、参加者が各々題材にしたいと思う絵本の選定作業。絵本選びに特別なルールはなく、物語の中から気に入った 1 フレーズをピックアップするもよし、1 冊丸ごと取り扱うでもよし、さらには図鑑の 1 ページに音をあててみるのもよし、といった具合。絵本選びというよりはまるで楽譜を選んでいくよう。全員が選び終えたところで、その選んだ本に抱いたテーマを互いに紹介しあう。皆で 1 つのイメージを共有しあい、最終的にどの本を作品作りの題材にするかを決めるための工程である。冒険ものの絵本、アラスカの写真集などと様々。最終的に候補に残ったのは、絵本『はらぺこあおむし』と、地球が誕生してから現代までの生きものの移り変わりを描いた『ちきゅうのうえで』の 2 冊。「食べる」「歩く」など音のイメージがつきやすくしっくりとしたストーリー構成もある『はらぺこあおむし』と、「古代」「微生物」といった音を想像力によって生み出す自由さを持ち、ストーリーというよりは時代の流れに沿って話が進む『ちきゅうのうえで』は正反対の題材。決定した題材に取り掛かる前に、参加者の 1 人が選んだ『あぶないいきもの』という題名の、その名の通り危険な生物だけを特集した絵本を使って、全員で音のイメージを合わせる練習をした。浜本さんが絵本の 1 ページをランダムに開き「せーの」の合図に合わせてそのページに載っている生きもののイメージに合った音を一齐に鳴らすといった練習内容である。ホオジロザメは低めの波のような音、トラフグは毒によってお腹を壊したギョルギョルした音といった具合に、皆思い思いの音を奏でていた。

3) 演奏

そして演奏へ。『はらぺこあおむし』から挑戦。あおむしが歩く音をどう表現するかで難航したが、色々な音を試し模索した結果、「段ボールの側面のでこぼした部分を木の枝でひっかく音」に決定。あおむしが果物やお菓子を食べるときの音はビニール袋をクシャクシャに丸める音で表現するなどの工夫がなされた。2 曲目の『ちきゅうのうえで』は冒頭の古代の海の中をイメージしたカリンバでメロディーを奏で、恐竜が絶滅したシーンではバーベキューコンロの金網をドラム缶式のコンロの底に叩き付け、鳥類が誕生した時代に突入した際は鳥の羽ばたいている音を表現するためにビニール傘の開閉を繰り返した。そして最も表現するのに苦戦した箇所は、最後のページの現代の人間社会である。多くの哺乳類や人間が誕生したページとのはっきりとした区別ができなかったからである。アイデアを出し合った結果、全員がその場でスマートフォンを取り出して電子音を出すことで現代のデジタルな人間社会を表すことになった。こうして完成した作品を、浜本さんの朗読とともに録音をし、鑑賞を行った。多くの工夫が音に乗せたメッセージとなり、朗読だけでは表しきれない迫力や癒しの効果などが強調された作品に仕上がった。CD 化したいほどの出来栄だね、などと感想を言い合い、本ワークショップは終了した。

【まとめ】

絵本 2 冊分の作品作りに残された時間が 90 分で、完成できるか不安だったが、参加者の自由な発想のもと無事に出来上がり、大きな達成感を得ることができた。音楽で物語を伝える面白さに気づけたという点でも大きな意味があるワークショップであった。さらに、作品作りの一連の流れを共同作業することで自然な会話が生まれるという、新たなコミュニティ形成の可能性が見いだせた。



語ろう！考えよう！「企業のESD宣言」

実施者：関 正雄（（公財）損保ジャパン日本興亜環境財団）

【概要】

「企業の社会的責任(CSR)の最新動向と ESD」のテーマのもと、CSRの動向や、近年注目される CSV という考え方、ISO26000 やそこで提唱されている SR について、事例を挙げながらお話しいただいた。また、「企業のESD宣言」を読み込み、改善点を探求したり、テーマについて参加者同士でディスカッションを行ったりすることで、理解や知識、考えを深めていった。

【実施内容】

・進化した、普及する CSR

CSR (Corporate Social Responsibility)「社会に与えるインパクトに対する企業の責任」とは、社会貢献、コンプライアンスであり、本業とは切り離されたものという認識があった。しかし現在、ビジネスのやり方を変え、事業活動の中に、環境・人権など社会への配慮を組み込むことこそが CSR であると考えられている。ステイクホルダーと密に協力することで、共通価値の創造というプラスのインパクトを最大化することである。

・CSR と CSV との違いは？

近年、企業の中でも、CSRに代わりCSVという言葉が用いられることが多くなってきた。米ハーバード大学のマイケル・ポーター氏により提唱された、CSV(Creating Shared Value)「共通価値の創造」という概念は、「経済的価値を創造しながら、社会的ニーズに対応することで、社会的価値も創造するというアプローチ」であり、社会にとっても企業にとっても Win-Win の関係であるとされる。企業の取り組みの事例としては、ユニリーバは、2010年11月に、成長とサステナビリティを両立する中長期的な視点に立ったビジネスプランを発表し、新興市場での売上を11%増加させることに成功した。一方、児童労働や強制労働など、人権を軽視した労働を黙認しているグローバル企業が存在するという現実もあり、CSRの重要テーマとして人権問題が取り上げられるようになった。CSRはポジティブインパクトを最大化し、ネガティブインパクトを最小化するという両方の側面があり、CSRの中にCSVが含まれると言える。ISO26000においても、CSVはCSR代替とはならず、CSRを前提としてCSVが進められるべきとされる。

・ISO26000 と SR の時代

ISO26000とは、「組織の社会的責任(Social Responsibility)」に関する国際規格である。2011年11月に発行された、持続可能な社会創造のために全ての組織に適応可能な、第三者認証を目的としないガイダンス文書である。これは、社会的責任は企業のみでなく、マルチステイクホルダーが相互依存し、全体としてアプローチすることが不可欠とする見方で、CSRの時代からSRの時代へ進化していることを示す。ISO26000は、CSR10年の進化の集大成で、社会的責任の世界共通語である。そして、新興国・途上国の参加により、CSRがますます普

及していくと思われる。「SR」の時代における、「ステイクホルダー・エンゲージメント」により、企業も静的なものから動的なものへと進化するであろう。

持続可能な消費のためには、消費者のアクションも欠かせない。例えば、Co2排出の約7割は消費段階であり、ここに切り込まない限り、大幅な削減は望めないとする報告が出ている。まさに、消費者は「消費者市民社会」の「脇役」ではなく「主役」なのである。

・企業のESD宣言

ESDは、今まで学校教育が中心であった。しかし、課題の複雑化・グローバル化や、持続可能な発展の根本に関わる生産と消費が進展する中で、社会の中で幅広いステイクホルダーが取り組むことが必要となってきた。特に、市場経済の主要アクターとしての企業の責任であり、同時に企業自身の持続可能性のためにも、企業におけるESD(=教育)は重要性を増してきている。

こうした背景のもと、ESD-Jの呼びかけで、ESDに関心を持つ企業・団体が集うネットワークの場として、2014年4月、「ESD企業の集い」が誕生した。そこで作成された「企業によるESD宣言」では、グローバルな視点/地域の視点・社内での教育/社会教育への貢献の4つの視点を持つことが不可欠だとされた。国連ESDの10年の最終年を機に、企業としても今後も関心を持ち、連携して取り組んでいくことが求められる。

【まとめ】

最後のディスカッションの中で、「未来＝未知のものに対して、どうアプローチしていくか」、「必ずしも、知らない＝やっていないではなく、ESDという言葉を使わないほうが上手くいくことも多いのでは?」「様々なステイクホルダーが共同で取り組むためには、対話による歩み寄りが欠かせない」等、様々な意見が聞かれた。参加者同士が意見交換をし、アプローチを考えるというプロセスが、SRを考える上でも欠かせないこととなっている。



電子絵本を活用した ESD プログラムを考える

実施者: 田之下 雅之(株) T クラフトプラス)

小川 結希(株) 自然教育研究センター)

小堀 武信(公社) 日本環境教育フォーラム)

【ワークショップに取組んだ背景】

日本環境教育フォーラムでは、(独)環境再生保全機構地球環境基金から助成をいただき、生物多様性をテーマに電子絵本の制作に取り組んでいる。電子絵本はウェブサイトが無償にて公開しているが、利用がなかなか広がっていないのが現状である。そこでワークショップの参加者に電子絵本を知ってもらい、電子絵本を取り入れたプログラムをみんなで考えたいと思い、ワークショップを開催した。

【ワークショップの概要】

《電子絵本の読み聞かせと解説》

まずはお互いに自己紹介をし、引き続き、参加者へ電子絵本を活用した読み聞かせを行なった。取り上げたのは「おばあちゃんのふしぎなめがね」。「普段の暮らしと生態系サービス」をテーマとし、今年の3月にウェブサイトへ公開した作品である。

読み聞かせの後には、電子絵本の特徴を伝えた。エフェクトや効果音の活用、絵本の場面に応じて解説を見られること、最後のページで、読者へのメッセージや生物多様性について解説ページを掲載していることが挙げられる。また、親子の読み聞かせやコミュニケーションを通して、生物多様性について考えるきっかけになって欲しいという制作の意図についても伝えた。

《プログラム考案ワークショップ》

電子絵本を活用してどのようなプログラムが考えられるのか。参加者を4グループに分け、グループワークに取り組んだ。

あるグループでは、どのような場所で行うかを考えた。「この絵本は子ども向けのため、設定するフィールドは子ども関連のところにしよう」という方針で、チーム内の意見がまとまっていった。

プログラム案の作成において重要なポイントは、どのタイミングで電子絵本を用いるかということである。例えば、フィールドワークへ出かける前に電子絵本を読み、生物多様性について学んでもらうのか、あるいはお菓子を食べる前に電子絵本を読み、食べ物の大切さについて学んでもらうのか。どのタイミングで使うのかで、聞き手である子ども達への効果が変わってくる。

《グループ発表と共有の時間発表》

グループ発表では、様々なプログラム案が出された。給食前の時限を調理実習とし、その前に電子絵本を読むことで、自分の好きな食べ物と自然の大切さを関連付けるといった案や、電子絵本を読んだ後にカードゲーム方式で様々なものの繋がりを考えるワークショップを開催するという案が挙げられた。あるチームから「このようなプログラムは一度だけの実施ではなく、継続的に実施することで、子ども達に定着が図れるのではないかな」という発言があった。一度で覚えることができる子どもはそう多くなく、環境問題を考える子どもを育てるには、何より継続性が大切ではないかという思いからの指摘であった。

【まとめ】

- 絵本を活用したプログラムは、どのタイミングで絵本を用いるかで、聞き手へ与える効果が変わってくる。
- 環境教育プログラムは継続的に実施することが大切である。



国連の新目標 (SDGs) は環境教育普及につながる？

実施者: 星野 智子・江口 健介 (一社) 環境パートナーシップ会議)

藤 公晴(青森大学)

【概要】

2012年の国連持続可能な国際会議(リオ+20)にて、2015年に達成期限が迫っているMDGs(ミレニアム開発目標)を継承するものとして、SDGs(持続可能な開発目標)を設定されることが紹介された。これから国連の定める目標がどのような影響を与えていくのか。

また、目標をどう定めていくべきなのかを実施者・参加者共に議論をし、異分野の人たち(参加者同士)がどのような活動・連携ができるのか、私たちの役割は何かを考えた。

【はじめに:SDGsに関する情報提供】

まず、SDGsに関する情報提供とその周辺の市民活動の動きや経緯についてのプレゼンテーションが行われた。SDGsは、人間が存続していく上で基盤となる健全な地球環境が損なわれてきていることから、持続可能性の観点を開発目標に組み込む必要があるとして策定されたものである。主に途上国の貧困削減や保健衛生などに焦点を当てたMDGsとは異なり、開発の3つの側面(経済、社会、環境)に統合的に対応しており、先進国・途上国すべての国を対象とする普遍的なものである。SDGsの概要を参加者に伝えた上で、SDGsは環境教育普及につながるか？という問いが参加者に投げかけられた。

【国際会議ってどんなもの？】

国際的な動きを理解するための参考として生物多様性について、生物多様性条約COP12を事例に伝えられた。生物多様性条約では、環境保全、生物多様性の持続的な利用、遺伝資源の利用から生じる利益の公正かつ衡平な配分などが盛り込まれていることなどが説明された。COP12についても決議内容、条約の議論と現場の実践をどうつなげるのかなどの問い、また愛知目標とSDGsが統合されるべきなのではということも話された。

【ディスカッション(モヤモヤの共有)】

ディスカッションの冒頭、SDGsに対する課題や論点が出された。17の目標は包括的に見るのかより目標を絞り込んで話すべきか、評価方法や指標はどう決められるべきか、などが挙げられた。参加者にとって初めて聴く情報が多く、モヤモヤを吐き出し、ある種の共有感を持ったディスカッションであった。

【ディスカッション2(モヤモヤの咀嚼)】

後半のディスカッションではグループで話し合ったことを発表。SDGsは国連加盟諸国で決議されたことであり、そのまま日本にすべて当てはめることには無理がある。したがって場所ごとの翻訳・通訳をしていく必要があるのではないか、暮らすことの価値を見直すことや、周回遅れの最先端という見方などが提議された。

【マップ作成】

ディスカッション後、全体の中で自分はどこにいるのか、自分の頭の中のをプロットしマップ作りを行った。自分の立ち位置、考えたことを好きな書き方で書き込んだ。様々なステークホルダーが各々の書き方で自由に思ったこと、考えたことを書き記した。

人づくり、ネットワークの強化、非日常などのキーワードと共に、環境と関わりの薄い人も巻き込むこと、自分のサイズに合った目標を作ること。などが話し合われた。

【まとめ】

SDGsを参考に、持続可能な社会の構築について、疑問や課題と向き合えたワークショップであった。SDGsもESDも広義なものであり、すべての人が同じ尺度で考えることはとても困難であることが示された。だからこそ、翻訳・通訳すること、伝えることの大切さが明確となる。実施者の方々が言われていた、Think globally, act locally、SDGsではなくSCGs(CはCommunity)。グローバルなことを考えるのだが、同時に地域で実践することにもっとフォーカスすべきということが強く提議された。国連の定めたESD、SDGsをそのまま解釈するのではなく、それぞれが自分なりの解釈をすることで、環境に関わる諸問題がより伝わり、伝えられていくと考える。



体感、出航！宇宙船地球丸「苦手は天文」ぶっ飛ばせ

実施者：中村 照夫・齊藤 透(月)の会・東京)

【概要】

環境教育に携わりながら、天文が苦手という人は意外と多い。天文苦手意識を払拭することで今後の参加者のプログラムにも応用できるよう、「こんなプログラムができるのでは？」というアイデアを提示。参加者がグループに分かれ、「自分ならこんなプログラムをしたい。」を考えた。

【実施内容】※ [クイズの答えは末尾]

《空気の厚さ》

地球を直径 30cm の球としたら、空気の厚さはどれくらい？ あなたのイメージは？ 【①】

この空気の層こそ私たちの生きている空間。

[地球が一つの乗り物＝宇宙船地球丸であること世界が運命共同体であることについて、再認識できるプログラム]

《地球・月・太陽》

地球の直径を 1cm とすると、月の直径は約 2.5mm。全員に、紙粘土で作った地球と月を配付。では、その距離は？ 【②】

この縮尺で、太陽の大きさは？ 【③】

地球と太陽の距離は？ 【④】

外に出て、実際の位置関係を体感。自分の瞳を地球として、②の距離に置いた月と④の距離に置いた太陽がほぼ同じ大きさに見えること(日蝕が皆既か金環蝕になる理由)も体感。

更に、地球は太陽の周りを 1 年で 1 周している＝地球は半年後には太陽の反対側の位置に行くこと・それが夜見える星(星座)が季節で変わる理由であることも体感。地球の移動速度が時速 11 万 km。[地球が一つの乗り物＝宇宙船地球丸であること、季節のある理由・太陽のすごさ・月の存在の重要性について、再認識できるプログラム]

《星・星座の動き》

天文が苦手と思う一番の理由は、どれがどの星だかわからないというもの。でも、実際は星の動きは至極単純。実は、太陽系の星以外は止まっており、地球の公転と自転がわかりづらくしているだけ。

立体空間での球体の回転運動、それも自分が回転する球体側に乗り、更に回転軸(コマの軸)が公転面に対して斜めという、通常の生活の中にはない状況のことなので、感覚的な理解を阻んでいる。そこで、地球儀の日本の上に人形を立たせ(自分と想定)、その周りに天球図が印刷された傘を置いて、実際の立体構造の中で最初のイメージを体感。

北極星と、天の赤道と、天の黄道さえイメージできるようになれば、後はもう簡単。天の位置の見分けがつかよくなるので、数個の一等星の名前を覚えれば、あなたはもう星博士。

《星座早見》

星座早見は、星の動きを確認するのに便利なツール。書いてある通りに日付・時刻を合わせれば、どの方向にどの星が観えるかわかる。けれど、「○月○日の○時にどの星が観える」と、一対一対応で考えているうちは、天文は苦手のまま。○月○日○時の空はそのまま動かすことなく◇月◇日◇時、△月△日△時、☆月☆日☆時の空でもある。つまり月日や時間を変えれば同じ空を観られるということ。

(北半球では)北の星は一年中、しかも一晩中観られる。それ以外の星も、一晩かければ 8 割方観られる。季節によって観られなくなる星も、全く観えないのは 2 ヶ月程度だけ。「夏の大三角形」も冬の 12 月でも日没時の西空に見ることが出来る。

《グループワーク》

4 グループに分かれ、「自分だったらこんなプログラムをしたい」ということをグループで共有し討議した。「星座の物語を解説しながら観察をするプログラム」「台湾の星座の解説を行うプログラム」「星座をお菓みに例えてケーキの上などに置いてみて、その後解説するプログラム」などが提案された。

【まとめ】

天文は、太陽や星座や距離などのスケールが大き過ぎてとっつきにくいように感じていたけれど、大きさや遠さの感覚が体感を通じて記憶に残る教育になる。また、地球儀をもっと活用し、子ども達と一緒に星座早見を使って天体を学ぶイメージがついたなど参加者から多くの感想や会話が伺えた。「天体は難しくない」ということを持ち帰り、環境教育の現場で「宇宙船地球丸である」ことを伝えられたら素敵である。

【 答え : ①0.2mm、②30cm、③1m、④120m 】



“自然学校と林業”環境教育は暮らし生業に直結せよ！

実施者：佐々木 豊志(くりこま高原自然学校)

綾井 治子(NTTジーピー・エコ(株))

宮原 元美(ミドリムシ不動産)

尾立 愛子(グリーンイメージ国際環境映画祭)

【概要】

森林資源の健全な循環のためには、森を壊さないで丁寧に伐り、残すための取り組みが必要である。そして、そういった背景や、誰がそのような林業を行っているかという情報を知れば、消費者はそれを応援するために、選択することができるようになる。そのため、森の入り口(森づくり)から出口(商品)までをつなげる仕組みである「Treesm(ツリーズム)」という考え方を、それぞれの取り組み例を交えて紹介したワークショップであった。

【実施内容】

1)はじめに

実施者から、自己紹介を行った。その後、参加者に席から立ってもらい居住地、職業、どんなエネルギーを利用しているか、衣、住、その他のうち何に関心があるかなど、自己紹介を兼ねて参加者の関心がどこにあるのかを確認した。その中でも、参加者自身の生活自給率については、ほとんどの参加者が0%に近いものであった。その後、森林と暮らしのつながりを考える「Treesm(ツリーズム)」についての話があった。

2) Green with Team NTT 気仙沼大島震災復興支援活動 ～緑の真珠海岸林再生プロジェクト～

NTTジーピーエコ(株)がCSR活動の一環で宮城県気仙沼市大島にて海岸保安林再生のために実施している事例について紹介を行った。1年目は津波で削られた場所に植樹を行い、そして、翌年には下草払いを行い、毎年下草払いは継続して行われている。プログラム内容は毎年変更しながら行っている。今後は農業や漁業など地域社会への展開も見据えていると語った。

3) モーラの家

モーラの家とは、アレルギーのない暮らしをするために、国産無垢材を使用し、接着剤などに化学物質を使わない賃貸住宅である。また、山との繋がりを意識し続けるためペレットストーブを設置している。共有スペースには家庭菜園や井戸があり、自然エネルギーの恩恵を感じることができる。モーラをの家の全てを「網羅」という思いが詰まった住まいである。

森づくりは100年単位で行われているのに対し、家は30年単位で行われている。だが、それでは日本人はいつまでたっても住宅貧乏である。森づくりと同様100年住める家を作り、自分たちの暮らしを築く必要がある。そのため、マネー資本主義ではなく循環再生可能な範囲でほどほどに稼ぎ、使うという里山資本主義をもって暮らす必要があると語った。

4) 馬搬

かつて、大型動物、馬や牛とともに山を守り田畑を耕していたが、昭和40年～50年位から後はほとんどの町や村から消えているのが現実である。在来馬を含む種の保存、現代の日本での大型動物との共生を考える上でも、無理に作業用の道を作らずに山を活かすあり方としても見直されるべき課題である。現在、岩手県の遠野市などで映像による記録が進められている。

5) 森林資源の利用

森は手入れを行うことで良い森となり、よい森林資源となる。そして、森林エネルギーは石油燃料に比べ地域の雇用を生むのである。さらに、電気で熱を供給すると効率は35～40%なのに対し、木質燃料の直接供給だと熱は90%の効率で供給される。

オーストリアでは森林資源活用が進められている。各家庭に木質エネルギーのストーブを入れなければならない条例を作った村があり、バイオマス地域熱供給が盛んに行われている。これだけ盛んに行われる理由は、小規模(個人、地域、農家)のエネルギー供給場所を増加させたことにある。そのため、小規模で供給していくことも重要なキーワードであるとした。

<まとめ>

グループごとに分かれ、今までの話のふりかえりをした。ここでは、森林資源の使い道、暮らしに自然のものを取り入れた生活をする必要性や馬搬の馬をシェアしてみてもはなど、様々な意見やアイデアが飛び交い盛り上がりを見せた。そして、最後に森林資源の健全な循環のためには“treesm”な森と生活者をつなぐ仕組みや様々な分野の人々に関わることが重要となってくるとした。



イノベーション創発型ワークショップのデザインを学ぶ

実施者:中西 紹一(立教大学大学院)

【実施内容】

1) 創発型ワークショップについて

実施者が携わってきた様々なワークショップの事例と共に、自己紹介からスライドが始まった。そして、創発型ワークショップの定義、具体的にどのような際に必要なのか、アウトプットについてスライドで紹介した。

2) 創発型ワークショップを実施する際の注意点

創発型ワークショップを実施する際の注意点が挙げられた。

①二者関係ではなく三者関係が前提…企業とファシリテーターだけでワークショップをすすめるのではなく、第三者を交えることで、ワークショップに係わる関係者が皆同じ学びを経験でき、教えるだけの人・教わるだけの人といった立場を作らせない。

②ハタケ違いの第三者=戦略的素人の活用…テーマと全く異なる領域の専門家、熟達者などを第三者として呼び入れることで、皆フラットな関係になり、議論が一気に活性化する。

③ファシリテーターは純粋な学習者として関与する…ファシリテーターが純粋な学習者で参加することで、モデルが完成する。

参加者からは「第三者はどこからつれてくるのか」、「違う専門性の第三者を、どのようにしてワークショップに混ぜるのか」、「子どもを第三者として呼んでみては」など様々な質問や意見が出て、前半は終了した。

3) 認知的徒弟制モデル

実施者が実際にワークショップを行う際に、モデルとしている

【認知的徒弟モデル】について紹介した。

認知的徒弟制モデル	
Modeling (モデルを提示)	思い込みを楽しく壊す
Coaching (課題に近づける)	揺さぶるテーマを投げかける
Scaffolding (足場をかける)	足場をかけて課題に近づける
Articulation (言語化する)	その手があったかを形にする
Reflection (振り返る)	体験したことを振り返る

ステップ1の Modeling について、実際に参加者の中から男女を一人ずつ選び前に出てきてもらい、バラを渡す時バックミュージックをラブソングと演歌だと雰囲気がどのように変わるのかというアイスブレイクを行った。するとラブソングでは愛の告白のような渡し方になり、演歌では少し荒っぽい別れのシーンのような渡し方になったことから、バックミュージックが違うだけで色々なシチュエーションが想定できるのだということを、参加

このように、既存の概念を楽しく壊すようなアイスブレイク作りが大切である。

ステップ2の Coaching では、テーマを「極楽」と「地獄」と言葉で聞かされても、なかなか具体的にイメージが浮かばないことについて、実際に宗教画の「極楽」と「地獄」を見てもらい、2つを見比べることで、ぼんやりした概念を視覚的イメージからゆさぶるアクションを行った。

4) ワorkshopを実際にやってみる

まとめとして参加者が、「新しい冷蔵庫の価値をデザインする」、「ゆさぶる環境教育のプログラム作り」この2つのテーマについて5~6人で1グループを組み、意見を出し合った。

「新しい冷蔵庫の価値をデザインする」について、「透けて中が見える」「サイズが変えられる」などデザインに関するアイデアや、「バーコード等で賞味期限を読み取ってくれる」といった食品を使い切る、という概念に着目したアイデアもあり、とても評価されていた。

次の「ゆさぶる環境教育のプログラム作り」では、実際に動物の命を奪うことで命について考えるプログラムや、スナックのママさんがお客さんに環境教育を教える「スナックのママ環境教育」などユニークな意見がたくさん出された。

5) まとめ

最後に行った「ゆさぶる環境教育のプログラム作り」のまとめとして、ゆさぶるテーマは誰もがフラットに対話できる内容にすることや、ゆさぶる・矛盾するようなテーマにすることなどポイントを復習した。

参加者の皆さんは終始意見を出し合い、スライドをメモしたりカメラで撮ったりとても意欲的な雰囲気であった。創発型のワークショップの作り方について具体的に学ぶことが出来た貴重なワークショップであった。



清泉寮で自然音楽野外フェスティバルをつくる

実施者: 鈴木 幸一(アースガーデン)

小川 結希・村上 友和(株)自然教育研究センター)

【概要】

フェスティバル(以下フェス)を自然体験、環境教育の場としてとらえ、清泉寮周辺を利用した野外フェスの企画を考えた。3グループに別れ、野外に出て現地調査の後、企画会議を行い全体で共有した。各グループから斬新なアイデアが飛び交い、環境教育を実践する場としてのフェスの可能性について考えることができた。

【実施内容】

1) 想いの共有・自己紹介

参加者同士がお互いを知るために自己紹介を行った。「名前」、「所属(普段の活動)」、「フェスのイメージ」、「このワークショップに参加した理由」を共有した。自分が行っていることとフェスとのつながり、環境教育とコラボした新しいフェスとはどのようなものかを考えるきっかけとなった。

2) フェスティバルの紹介

まずフェスについて共有した。フェスティバルとは、祭礼・祭典という意味を持つ。日本では1997年の「フジロック・フェスティバル」から始まり、この15年で「野外音楽フェス」が定着している。中には環境教育をコンセプトとし、自然とつながったり、環境のことを考えるきっかけとして機能しているものもあったりする。フェスでの自然体験、環境教育の事例として山梨県道志村のキャンプ場と、東京都の代々木公園で行われたフェスでの取り組みをそれぞれ紹介した。

3) 現地調査、フェス企画会議

参加者を3人1グループの合計3組に分け、野外の下見とフェスの企画会議を行った。女性だけのグループや、フェスを経験したことがないグループ、フェスに参加経験または興味のあるグループとそれぞれ特徴のあるグループとなった。

野外に出る前に、メインステージ、飲食ブース、キャンプエリアなど、現在行われているフェスを構成する要素を紹介し、企画会議の参考とすることを促した。

その後、グループごとに野外に出て、清泉寮周辺を確認した。各グループそれぞれ、場所の特性を活かしたコンテンツを検討している様子が見られた。

屋内に戻り、グループごとにフェスの内容を検討した。その際に以下の4点を検討することを促した。

1. フェスのコンセプト・キャッチフレーズ
2. 会場全体のエリア分け

3. 各エリアのコンテンツ

4. フェス全体のメッセージ

4) 企画内容の共有

各グループで企画したフェスの内容を共有した。

・「つくるフェス」

会場で音楽、料理、クラフトなど様々な「つくる」を体験できるフェス。このフェスに込められたメッセージは「つくることの楽しさを味わう」というものであった。

・「ESD(ええじゃないか せいせんりょう)でROCK FES」

開催時期を冬とし、清泉寮を中心とした周辺の各施設(場所)で様々なタイプのライブを行い、環境を存分に楽しむフェスであった。

・「JJI ROCK」清里周辺に住む年配の方々の得意分野を活かしたイベント内容となった。対象も年配に焦点を当てているが、各世代が交流できることも大切にしていた。

いずれのグループも、フェスの会場で自然の楽しみ方を提供したり、体験を重視している点が特徴的だった。

【まとめ】

フェスの多くは野外で開催され、自然体験や環境教育の素材が豊富である。参加者の多くはキャンプなど、野外活動の経験や興味がある傾向があり、子連れで参加することも多い。また地域、土地の特徴を生かすことで、フェス自体にメッセージやテーマを持たせることができる。

このようなことから、フェスは自然体験や環境教育を実践、提供する場所としては絶好と言えるのではないかと。さらには自然や環境、SDに関心が薄い人に対して、気づきや行動を促す場所としての可能性も、今回のワークショップを経て垣間見ることができた。



教育と刃物 ～ナイフを使う喜びを子どもたちに！

実施者：鹿熊 勤(NPO 法人日本エコツーリズムセンター)

小林 潤也・水谷 理(ビクトリノックス・ジャパン(株))



【概要】

「危ない」という理由で子どもたちから刃物が遠ざけられるようになって、もう半世紀も時が過ぎている。その間、さしたる議論もされることなく現状だけが追認されてきた。刃物は人類史にも深く関わりたいへん重要な道具である。NPO 法人日本エコツーリズムセンターでは、スイスでポケットナイフ・マルチツールを製造するビクトリノックス・ジャパン株式会社とともに、2013年6月から2014年5月までの一年間、『教育と刃物』という連続セミナーを開催してきた。清里ミーティングの3時間ワークショップでは、刃物という道具の社会的位置づけをもう一度見直すことで、新たな教育的価値の創造につなげていこうと、1年間のセミナーの報告と、実際にナイフを使った箸づくりワークショップを実施した。

★第一部「子供の刃物の現状」

NPO法人日本エコツーリズムセンターが1年間12回にわたって開催した「教育と刃物」セミナーの概要とその狙いについて紹介した。中でも、自然体験教育に関わる者が危惧する「刃物に触れさせなければ問題は起きない」とする考え方の危険性やその背景について、長野県で30年にわたり肥後守(小刀)で鉛筆を削らせる取り組みを続けてきた小学校を例に、詳しく話題提供した。また、日本には職業の数だけ優れた刃物があった。刃物は暮らしを支える利器であったことを肌で実感し、連続セミナーでも好評だった「はたらく刃物ミニ博物館」を開催、実際にさまざまな刃物を手に取っていただいた。刃物と対の関係にある研ぎの大切さにも触れ、天然砥石を使って実際に研いでもらう実習も行った。

●連続セミナーの内容は以下の通り。人類と刃物／銃刀法の現状と影響／肥後守で鉛筆を削る学校／冒険遊び場パークでの刃物の役割／ナイフメーカーの脳育教育の取り

組み山村留学の暮らしと刃物／被災地で果たした刃物の役割／自然教育ソフトとしての動物解体技術／スカウティングと刃物／森の匠の刃物講座／ガキ大将キャンプで30年間ナイフを与え続けて／刃物を作る現場、使う現場。

※内容は日本エコツーリズムセンターのホームページからダウンロード可能。

ファシリテーター：鹿熊勤

★第二部「子どもに教える正しいナイフの使い方 ビクトリノックス・マルチツールを使った工作について」

ビクトリノックス・ジャパン株式会社が、2010年から行っているCSR活動「安全で正しいナイフの使い方を啓発」のこれまでの歩みや、ナイフの無償貸出「工作イベントサポートプログラム」の説明を行った。また、ナイフを使う時の約束を子どもが理解し、大人(親・保護者)が子どもを信頼してナイフの使用を許可した証の「ビクトリノックス・マルチツール・オーナーズ・ライセンス」の紹介や、日本初となる日本とスイスの「道具、ナイフ教育意識・実態調査」の結果報告を行い、子どもが実際にナイフを扱うことが、責任感や創造性を育む一助になることの可能性について情報共有した。

参加者全員に、子どもがはじめて持つナイフとして開発したマルチツール「ティンカーfor KIDS」を手にしていただき、ナイフの基本的な使い方の説明後、ひのきの端材を材料とした箸づくりワークを行った。集中してお箸づくりを体験し、削るほどに香るひのきの自然の温もりを感じていただくひとときとなった。

ファシリテーター：小林潤也・水谷理



シニア自然大学を作ろう

実施者：佐藤 初雄(NPO 法人国際自然大学校)

塚原 宏城(NPO 法人神奈川シニア自然大学校)

瀬尾 隆史(公社)日本環境教育フォーラム)



【概要】

シニア自然大学は、少子化・高齢化、シニア世代の孤独化、老人難民化等の課題を抱えるシニア世代に、「自然を通じて、健康で自立し生き生きと生きがいを持つシニア」を育てるべく活動をしている。今回のワークショップでは、各シニア自然大学(シニア自然大学校、神奈川シニア自然大学校、東京シニア自然大学)同士での情報交換を行い、更に参加者と共に、「今後のシニア自然大学はどうあるべきか？」について考えた。

【実施内容】

1)はじめに

実施者より、「なぜシニア自然大学が必要か」「役割はどういうものなのか」について日本の社会問題を絡めた話があった。

2)各シニア自然大学の取り組みについて

①シニア自然大学校(大阪)

シニア自然大学校は、大阪市に本部があり、「平和で豊かな社会の実現」を目指し、自然環境教育と社会文化活動を積極的に行っている。主な活動として、年間自然学習講座(自然環境の保全と持続可能な社会について学習)、年間子ども環境学習講座(子ども向けの自然に親しむ学習)等の講座とともに、修了者には生涯活動の場や社会貢献活動の機会の提供を行っている。活動の中で、地域活動のみならず環境活動を実りあるものに行っているのは、あつい情熱、忍耐力、常に明るく前向きな姿勢である。人と自然を大切にしながら、仲間と行動を起こしている。

②神奈川シニア自然大学校(神奈川)

神奈川シニア自然大学校は、2011年に設立され、人材育成(環境活動を行う人材)、シニア世代の活性化(自然をテーマに楽しく生き生きと)を目的としている。「自然派ビギナー講座」といった、フィールド活動を行っている。講座を終え、「職場・家族を超えた仲間ができた」、「自然への興味が深まった」との声も挙がり、今後は、講座アシスタント、各種イベント参加、山サークルへの参加を目標として活動している。

③東京シニア自然大学(東京)

東京シニア自然大学は、日本環境教育フォーラム(JEEF)主催で2013年4月に開校。1年間、自然全般についての講座を実施し、修了後はJEEF専科・NEXT(自主活動)の2部で引き続き学習が可能。講座では講師陣と受講生とのコラボが実現している。そこで学んだ受講生からの声で、JEEF専科とNEXT(自主運営)の2部構成で発展的に活動をしようとなった。NEXT(自主運営)では、目的は、NEXT会員相互の親睦を深め、健康で生きがいのあるシニアライフを送ることである。講座は、NEXT会員提案により計画し、ボランティアガイド又はNEXT会員が講師となって野外活動を中心に活動している。

3)今後、シニア自然大学に期待すること

シニア自然大学が発展するにあたって、今後どのようにあるべきか(講座の内容、仕組み、役割)について、意見交換を行った。そこでの意見として、「地域を活かし、世代を越えた交流の場としての活用」「健康・長寿をキーワードとし、シニアの輪を増やしていく」「企業とのつながり」「20年後のシニアはどうするか？」などがあつた。

【まとめ】

「沢山の事例を元に、そこから新しい意見も聞けた。その新しい意見を今後積極的に取り入れていきたい」との話があつた。

今後の社会では、高齢化は避けては通れない道である。その高齢者のなかでも元気なシニア層へのアプローチをすることで、地域活性化、シニアの自立化、持続可能な社会作りになるのではないかと、考えさせられる講座であつた。



自己肯定感を育む ESD ～これからの学びへの提案

実施者:新海 洋子(環境省中部環境パートナーシップオフィス)

大塚 明(静岡県田方地区教員研修協議会)

村上 千里(NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議)

【概要】

愛知・名古屋の国際理解教育、市民教育、子どもの権利・社会参画、NGO 支援、フェアトレード等をテーマに活動している NPO/NGO が中心となって、教員の支援をうけながら、「これからの ESD 実践への提案『自己肯定感を育む環境をつくる』」を約 2 年の協議を重ねて作成。2014 年 11 月に開催された ESD ユネスコ世界会議の併催セミナーにて発表した。本分科会は、この提案書をもとに、自己肯定感の重要性を共有し、育む環境をつくるためにできることについて、意見を交わす場として実施。静岡県伊豆市の中学校で、ESD を通して自己肯定感(自尊感情)の育みを検証された大塚先生をゲストにお招きし、学校での取組の成果報告と提案書の内容を重ねワークショップを行った。

【実施内容】

1) 自己紹介

名前・所属・WS への参加動機を書き紹介した。参加者の参加動機を共有し、「自己肯定感」というキーワードに対して、参加者それぞれの活動や仕事等を通しての考え方、イメージを共有した。

2) 「自己肯定感」の重要性を理解する。

事例として、天城中学校の取組紹介を行った。『天城中学校では、「生徒に自信や誇りを持たせる」を教育課題としていた。そこで ESD に出会い、持続可能な社会の担い手を育てる教育として、①体験を通して地域の良さを知る、②地域の未来像を描く、を実施した。総合的な学習の時間を ESD の視点で組み直し、地域での体験活動の重視、地域の人とのつながりの重視、各教科と総合的な学習の時間のつながりの重視、の3つをポイントにして授業カリキュラムを作成した。地域の人々との出会いや自然体験学習を通して、生徒は自分たちの暮らす地域に誇りをもち、抱えている課題の解決を考えるようになった。地域への愛着が自分自身の存在の誇りになり、自尊感情の高まりにつながっていった。』その後、「提案書」に掲載した 3 つのビジョン、8 つのミッション、15 のアクションを各自で、グループで読む時間を設けた。自己肯定感に関連する調査において、「自分によいところがある」と思えない小学 6 年生が 4 人に 1 人、「自分を好きになれない」子どもが半数、「自分に価値があると思える」高校生は 7.5%、といった結果がでており、日本の子どもたちの自己肯定感の低さをデータから把握した。

3) グループワーク「自己肯定感をめぐって、フリートーク」

3~4 人のグループに分かれて、自己肯定感についての議論で何を深めていくべきかを探るために、フリートークの時間を持った。日本人の自己肯定感が低い要因として、日本の子どもたちが集団依存型の社会の教育や評価によって育てられていることが大きく影響しているのではないかと。周りの目や声を気にしすぎて自分を集団と同一化し、自分の意見や表現が出せなくなっているのではないかと、などが提起された。

4) グループワーク「自己肯定感を育む」ために、私にできること

これまでの情報や意見から、今後自己肯定感を育むために、自分のできることをグループ内を出し合い、共有をした。

大人として子どもたちへの声かけ、問いかけ、接し方をていねいにする。大人の考えを子どもに押しつけず、まず子どもの意見をまると受け止める。子どものアイデアを尊重することで豊かな発想を導く。子どもに対して無関心でない。関わる。伝える。大人の引き出しを多様にして、子ども主体が必要だというものを提供する。子どもが達成感をもてるように、新しい視点で新しいチャレンジを導く。子どもの発言を社会の評価、ものさしで判断しない。大切に。いいところをほめる。多種多様、異質を認め合う。成功体験を積み重ね、プラス思考を育む。社会に対して、自己肯定感ってなんだろう?と問いかけ、その大切さを伝える。子どもたちの可能性を引き出す力と聴く力を大人はもつ。学校でできない体験を提供し、学校以外の居場所をつくる。大人の感性を育て直す。子どもの意思を大切に。子どもの意思を見守る大人になる。子どもが見つかるサポートをする。感性と自己肯定感が結びつくプログラムを実施する。地域に誇りをもっている大人と出会う体験をする。

【まとめ】

日本の子どもの自己肯定感の低さは、子どもに問題があるのではなく、大人が作りだした社会環境、人間環境に問題がある。だからこそ、それに気づいた大人が、発信し、具体的な行動をしないと何も変わらない。子どもたちを育む状況が悪くなる一方で、持続可能な社会、未来の実現は遠のいていく。大塚先生は、ESD に取り組むことを通し、子どもの自尊感情、自己肯定感が高まることを実証した。グループワークから導き出された提案は、「自己肯定感の育みなくして学習効果は高まらない」だった。ESD は、SD を実現するための教育、持続可能な社会を創るための教育であるから、表裏一体である。環境教育や ESD を実践されている方、教育現場にいる方だけでなく、全ての大人は、子ども、次世代との関係性、つながりをつくっていくことが求められる。参加者の参加動機の共有、自己肯定感の重要性の理解、自己肯定感を育み高めるために必要なこと、自分のできること、の一連の流れから、「持続可能な社会をつくるためには、家庭、学校、地域での『自己肯定感』の育みが必須である」という命題への理解を深めることが出来た。参加者自身ができること、すべきことを明確にし、その大切さを共有する時間を持つことが出来た。



GEMS の新しい使い方 ～森の中で、図書館の片隅で～

実施者：鴨川 光・柴原 みどり(ジャパン GEMS センター)



【概要】

GEMS (Great Exploration in Math and Science ; ジェムズ) は、カルフォルニア大学バークレー校の附属機関ローレンス科学教育研究所で開発されている、幼稚園から高校生年代を対象とした科学・数学領域の参加体験型プログラムである。

本ワークショップでは、2つの GEMS のプログラムを通して、参加者の自由な想像力を引き出しながら、普段の生活の中にある科学と数学を様々な角度から探求した。

【実施内容】

1) はじめに

全員で円になり、それぞれが履いている靴を観察した。参加者が順に1つ靴の特徴を言い、それに当てはまる特徴の靴を履いている人たちが片足を一步前に出すという、アイスブレイクを行った。同じカテゴリー(靴)の中にも、形や色、素材などに違いがあり、一定の規則によってさらにカテゴリー内が分類出来ることを気づかせてくれる時間となった。既成概念にとらわれない、そんな GEMS の参加型プログラムがここから始まった。

2) 「宝もの箱 ～葉っぱ図鑑をつくらう」

暖かな日差しが、紅葉の隙間から漏れる穏やかな時間の中、参加者に「これ、好きだな」「これ、おもしろいな」と感じた葉っぱを袋に集めてきてもらった。ルールは「落ちている葉っぱを拾う」それだけ。参加者は集めた葉っぱを仲間分けし、どんな理由で仲間分けしたのかを皆に紹介した。理由には葉の形態や色だけではなく、葉脈の広がり方や葉触り、葉の巻き方、虫食いの有無などが挙げられ、自由な想像力が発揮された。参加者が、まるで分類学者になったように各自の理論を展開する姿が印象的なプログラムとなった。

3) 「タマゴタマゴ ～ここにもあそこにも」

“ぐりとぐら”というおはなしを、実施者が読み始めた。ぐりとぐらが大きなタマゴを見つけ、それを運ぼうとするシーンからおはなしサイエンスが始まった。ぐりとぐらが野ねずみだとして、その体長が 10cm だった場合、このタマゴの大きさや重さは一体いくらなんだろうか…？おはなしの中の数学に着目し、そこからタマゴのサイエンスに入っていく GEMS の魅力的なプログラムが展開された。題材はタマゴという身近なものだが、よく知っているタマゴといえばニワトリやウズラのタマゴくらいで、それ以外のタマゴには普段あまり馴染みがない。多種多様なタマゴは実はおもしろい教材なのである。サイエンスとしては、卵生の生物を学び、各自が興味のあるタマゴの形態・色などを図鑑で探った。参加者自らが想像力を発揮し、他の参加者とコミュニケーションをとりながら楽しく学べるプログラムであった。

【まとめ】

今回の2つのプログラムは幼稚園児以上を対象に行えるもので、本来の GEMS のプログラムにアレンジを加えた内容。GEMS はプログラムそのものを提供するのではなく、考え方を提供するもので、使用者はそれぞれのフィールドに合ったアレンジをプログラムに加えることができる。GEMS のコンセプトは“科学者になろう”である。そのためには、既成概念を捨て、よく観察し、よく考察することが必要である。そこへ繋げるには、子ども達が自ら知りたいという気持ちになることがポイントだという。誰かが提示しなくても子ども達が自ら学ぶ“持続可能な学び”こそが、GEMS の目指すところであり、また、今後の ESD の発展にもつながっていくだろうと結んだ。



KP 法 (紙芝居プレゼンテーション法) の工夫共有ワークショップ

実施者:川嶋 直((公社)日本環境教育フォーラム)
飯島 邦子(PROCESS Laboratory)

【概要】

手書きの文字でキーワードを書いた紙をホワイトボードに貼りながらプレゼンテーションするという KP 法を用いて、事前に参加者が用意してきた発表を行い、全員でフィードバックをし合いながら、いかに情報をシンプルに早く伝えるかについて考えた。単に実施者が解説し教えるのではなく、参加者全員が KP をする側、聞く側の両方の立場に立ち、より多くの工夫を発見し、共有するワークショップとなった。

【実施内容】

1) はじめに

自己紹介を兼ねて、今日用意してきたテーマと、KP 法に興味を持ったきっかけ、このワークショップに参加しようと思ったきっかけなどについて話をした。KP 法を教育に生かしたいという意見や、実施者である川嶋さんの話を聞いて共感し、興味を持ったから等の意見が上がった。

2) 参加者による KP

KP 法初心者から何度か経験を積んでいる人まで、様々な参加者がいる中、各々のテーマで KP 法を用いて発表を行った。一人一人の発表が終わるごとに参加者全員でフィードバックと、川嶋さんが工夫やポイントなどを解説。紙のレイアウトや立ち位置など基本的なことから、話の途中に「間」をつくることで聞く側の興味をひくことや、相手の記憶に残る話し方などの上級テクニックまで学んだ。話の順序立てについては、PREP 法を紹介した。PREP 法とは、Point Reason Example Point の頭文字を取っており、最初にポイントと結論を持っていき、理由、具体的な内容、最後にまた結論という流れで話をする方法である。また、紙に書いたキーワードに対してどの程度解説、補完すれば良いのかという質問に対しては、ライブと同じで現場で調整すると答えた。初心者には難しいことであるが、聞いている人の反応をよく観察し、理解しているのか、していないのかを判断しながら、話を補ったり省いたりして調整しているようだ。

3) 文字の書き方講座

どうやって見やすく上手い字を書くのか。一人一本ずつペンが配られ、ペンの持ち方の解説を受け、紙に試し書きをして文字の練習をした。ポイントは、ペンは細い方より太い方を使う、漢字は大きく、ひらがなは小さく、瘦せた字より四角い字であること、色を多く使いすぎないこと等であった。KP 法は一枚一枚のスライドショーではなく、最後に完成したときに全体像を見ることが出来るため、パッと見たときに目立つ色の使い分けや全体から受ける印象を左右する配色は大事だという。

4) KP 作成の 5 段階

参加者の発表とフィードバックを踏まえて、改めて KP を作成するときの手順について川嶋さんが解説。0 段階のテーマを決めるところから 1. テーマについて考えていることをすべて書き出す 2. 整理する 3. 構造化する 4. 言葉を選ぶ 5. 色を選ぶ といった形である。このように KP を作成することで、頭で考えるだけでなく、手と目で考えることができるため、脳内の整理に役立つという。KP 法の練習をするのに、まずは自分が日常でいつも考えていることをテーマにすることを勧めた。

【まとめ】

今回のワークショップは、「とりあえずやってみよう」という形で始まった。参加者それぞれが客観的な意見を聞くことで、自分では気づけない部分を学ぶことができ、いろいろな人の発表を見聞きすることで新たな発見もあった。最後に川嶋さんは、伝えたいことをシンプルに、相手にグサッと刺さるように話をするのが大切だと締めくくった。



小学校で環境教育をやるう！ Part II

実施者：佐藤 敬一（東京農工大学）

河又 彩（白鷗大学）

【概要】

小学校の授業で環境教育をやるにはどうしたらいいか。本ワークショップでは、プロジェクト・ラーニング・ツリー（Project Learning Tree, PLT）と呼ばれる環境教育プログラムを用いて、実施者が小学校で実践をしているアクティビティを参加者自ら体験し学びを深めた。そして、そのアクティビティによって自然について児童に伝えるにはどうすればいいかを考えた。

【実施内容】

1. 初めに

参加者は、まず木の名札づくりとバードコールづくりを行った。その後、自己紹介を行った。そして、実施者がこのワークショップの主旨と PLT の説明を行った。PLT はアメリカで開発された環境教育プログラム。子ども達に、複雑な環境問題について理解してもらい、質の高い環境教育プログラムを提供することによって、責任ある大人になってもらうようにという思いがある。学習指導案として書かれており、学校でも取り入れやすくなっていることの説明を行った。

2. アイスブレイク

アイスブレイクとして、「ラインナップ」というアクティビティを行った。これは PLT ではないが、しゃべらずに、ある法則で一列に並び替えるというもので、最初は背の高い順というようにわかりやすいものであったが、徐々に手の暖かさ順、名前前の、いろはにほへと順というように高度になってゆき、みんなで協力しながら解決をしていくことによって、緊張もほぐれてきた。

3. 木は工場（PLT）

木の構造について紙芝居形式で説明をした。木の部分は「心材」、「辺材」、「形成層」、「師部」、「樹皮」、「根」、「葉」に分かれており、それぞれの役割について理解した。心材は木を支える役割、辺材は水を作る役割というように、それぞれの部位が重要な役割を担っていることを説明した。その説明をした後に、「根」以外の部分が入った袋から一つだけ取り出し、参加者全員がどこかの部分になるように決めた。そして、心材となった人を真ん中に、辺材、形成層の順番で手をつなぎ合い、幹を作った。そして、葉の役割の人が、幹からロープを張り、全員で一つの木を作った。このように全員で木を作ることによって、各部分それぞれが重要な役割を担っていることを学んだ。

4. それぞれの木に必要な物（PLT）

席に座り人間が生きるのに必要なことは何かということを出し合った。空気、水、栄養素、服、ゲーム、音楽等様々な意見が出たが、これを文化的、生理的なものに分けていく。そして、木には何が必要かを考えた。また、参加者全員がそれぞれ苗木となり、それぞれに見立てた 3 色の紙をみんなで奪い合うアクティビティを行い、間伐の意義について学んだ。

5. 大親友（WILD）

様々な生きもののカードが配られ、その中でペアになる生き、ものを探す。実はこれは共生をしている生きものたちのペアであり、片利共生、相利共生、寄生のペアに分かれていた。共生のペアが分かったのちに、そのペアでまず神経衰弱を行った。楽しみながら共生について深く知ることのできる、Project WILD のアクティビティ（これ以外は PLT のアクティビティ）であった。

6. 鳥と虫（PLT）

2 チームに分かれて、鳥になり部屋の中に隠された、敵チームの虫に見立てた輪ゴムやモールを探すアクティビティ。単純なゲームであるが、各チーム工夫をして隠しており、互いになかなか敵チームの物を見つけることが出来なかった。このゲームから、鳥が餌をとるときの思いや、同化しているものはなかなか見つけにくいというカモフラージュの考えを学んだ。

【まとめ】

参加者同士がみんなで協力し合うアクティビティを行うことが出来る、PLT 等の実践的な環境教育プログラムを紹介した。参加者からも、今までの学習とは一味違う学びを得ることが出来たという感想があった。そして、最後には総合的な学習の時間で実施者が行ったときの学習指導案等を紹介し、実際に小学校で導入するときの考えや、指導計画について話し合った。



2 日目

全体会 2

全体会 2

2-1 「ESD の 10 年後の環境教育」 @清泉寮新館ホール

進 行 : (公社)日本環境教育フォーラム理事 中野 民夫

2-2 「清里ユースミーティング～YOUは何しに清里へ?～」

@清泉寮本館ホール

進 行 : (公社)日本環境教育フォーラム事務局・学生部



2日目 全体会 2-1

@清泉寮新館ホール

「ESDの10年後の環境教育」

進行：(公社)日本環境教育フォーラム理事 中野 民夫

今年の全体会2では、初の試みとして会場を二つに分けて行った。1. メイン会場の新館ホールでは、初日の全体会1で行ったESDをテーマにした情報提供と意見交換を受けて、ESDに関連することを深めていく場として、日本環境教育フォーラム理事の中野民夫を進行役に展開した。

(1) はじめに

“ESDのための10年”が終わって、これからどうしていかを
考える場としていきたい。

“ESDのための10年”に直接深く関わってきた人はそれほど多くない。ESDとは、「持続可能な社会のための人づくり」などいろいろな言い方がされるが、「よりよい社会作りのための人づくり」とも言える。ここにいる参加者それぞれの環境教育やESDに関わって活動してきた10年をふりかえることで、“今出来ていること、今出来ていないこと(=課題と可能性)”を明らかにし、環境教育の今後を考えるきっかけとしていきたい。



(2) ESDの10年に深く関わって来た方からの事例紹介

参加者のふりかえりの前に、ESDの10年に深く関わってきた3名から活動事例を紹介いただいた。世界で国で地域でと、それぞれ活動してきた中で、“何がうまくいって、何がうまくいかなかったか。”3名のこの10年を全員で共有した。

①星野 智子 ((一社)環境パートナーシップ会議)

ヨハネスブルクサミットを皮切りにG8サミット、リオ+20など、国際的な会議などを通して、政府との対話や協働の取組の推進への活動に寄与。



②村上 千里 (ESD-J理事・事務局長)

2003年のESD-J発足から12年、地域ミーティングやミーティングを重ねネットワーク化やモデル事業の展開、さまざまな場面でESDに関する提言などの活動を進めてきた。



③新海 洋子 (環境省中部環境パートナーシップオフィス)

愛知を中心に、地域での組織作り、毎年の地域ESDフォーラム開催、学校や自治体、企業への働きかけ、“みんなのESD”をキヤッチコピーに、誰もが参加できるESDの取組を目指す。



(3) 参加者それぞれの10年をふりかえる

プチライフストーリー曼荼羅（ひとつの円で人生を振り返るツール）を使って、それぞれの10年をふりかえったのち、近くの数名でシェアした。



最後に、「いつかSDが普及し、みんなの旗印になった時代にSD・ESDって何？ってわざわざ聞いていた時代があったよね」と思い出せることを願い、中野理事のギター演奏に乗せて「中島みゆき/時代」を合唱して全体会を締めくくった。

(4) 今後の展望

ふりかえった10年を踏まえて、これからしていきたいことを考えた。

事例紹介をした3名と一部の参加者、阿部治理事(立教大)がこれからの展望を締めくくった。

- ・**星野** 持続可能な地域づくり、持続可能な消費と生産
⇒その為にも、自分が幸せになる。
- ・**村上** 地域のリアルを知る旅をして、次につなげていきたい。
- ・**新海** “今あるもの” + α で、“今ないもの” を作っていく仕掛け人に。その為の交渉人になっていきたい。個人だけではなく、ネットワーク化や組織化を進めていきたい。
- ・**加藤大吾(都留環境フォーラム)** めぐるモデルを伝える。循環型の暮らしの実践を伝えていきたい。書籍の出版。海外へも伝えたい。また、“めぐる暮らしぶり”の追求を。
- ・**中西紹一(立教大学大学院)** 国際たすきがけ交流：異なるステークホルダーが、ESD・環境教育をプラットフォームに交流できると、より相互理解が深まるのではないかな。
- ・**大前純一(エコプラス)** 足元から未来へ。伝統知の継承。新しい民主主義へのつながり。
- ・**阿部治(立教大学)** ESDは、まだまだ志半ば。日本全国がSDではない状態。あらゆるセクターがSDの旗印の下、活動をしていかなければいけない状況。地域をベースに場作りをして、日本全国で対話が進み、SDを具体化していくための活動を加速していかなければならない。そして、世界へと影響を与えていく組織、人、場を作っていきたい。今回の清里ミーティングがそのきっかけになればいい。

2 日目 全体会 2-2

@清泉寮本館ホール

「清里ユースミーティング～YOUは何しに清里へ?～」

進 行 : (公社)日本環境教育フォーラム事務局・学生部

全体会 2-2. 本館ホール会場では、日本環境教育フォーラムの若手職員・学生部が中心となって若者世代で交流を深め、モチベーションや問題意識を共有する場としてユースミーティングを開催した。

(1) はじめに

本館ホールの外壁に沿って椅子が並べられ、70名以上の参加者が大きな円を描いて向かい合った。清里ミーティングに来るのも初めてという参加者が多く、これから何が始まるのか期待と緊張が入り混じった雰囲気の中、日本環境教育フォーラム学生部によるアイスブレイクを皮切りにユースミーティングは始まった。

続いて、主催である日本環境教育フォーラムの若手職員から今回の趣旨を説明した。先のESD世界会議において、世界のユース世代が行っている様々な活動について紹介した。日本のユース世代も何かを生み出しているのではないかと。そのために、まずは横のつながりを深めたい。自分はどのようなことに問題意識を持っているのか、何を成していきたいのか、今後どのような日本にしていきたいのか、同年代だからこそできる夢のある話をしている。

(2) 若者同士の思いを語り合う

今回のテーマは、各地で環境に向き合っている若い世代が知り合い、つながることであった。そこで、6人程度の小グループに分かれて「えんたくんミーティング」を行った。自分は普段何をしているのか、どんな環境トピックに興味があるのか、清里には何を求めてきたのか…など、このホールにたまたま集まったメンバーがどのような人たちなのかを語り合う時間をメインに据えた。

若者同士で交流する場に飢えていたのだろうか、それぞれのグループで現状の環境教育に関する疑問や、自分が今ぶつかっている壁といった踏み込んだ話まで盛んに議論されていた。特に、学生たちからは進路についての悩みや、環境教育で就職した後の生活についての質問が多数出ており、若手の自然学校職員、環境NGO職員たちから率直な現場の話を開けたのはとても参考になったようであった。環境教育は実施する地域の風土、人、文化といった土地柄によって様々な特徴があり、標準化されたやり方があるものではない。全国から参加者が集まる清里ミーティングにおいては、この環境教育の多様性に触れることができるのが魅力の一つであり、他所の実践を聞くことで学びが得られることも多い。

さらに、若手が自分の考えを発信していくことがこれから大切になってくると感じた。交流会やワークショップでは、若手は経験豊富な参加者の話を聞きに回ってしまうことが多く、自分の考えを場に出すことが少ない印象がある。ユースミーティングでは、全員が聞き手であり、話し手であった。自分の中にある思いを言葉にしてみることで、周りからフィードバックを得られ、新たな視点で捉え直せることがある。実際に会場では「なるほど!」「た

しかにそうかも」といった気づきの声があがっていた。

(3) おわりに

えんたくんミーティングを3回異なるグループで行った後、最初のグループに戻り他のグループで話をして感じたことを共有した。その際、日本環境教育フォーラム職員が以下のように投げかけた。

「環境問題は何十年、何百年も前から積み残されてきている負の遺産だ。私たちユース世代は、生まれた時から環境問題が声高に訴えられている時代で生きている。しかし、それは私たちだけが積み上げてきたものではなく、先人たちが解決できずに残していったものだ。環境問題が当たり前になりすぎて、それを解決するための環境活動ばかりにとらわれていないか?先人たちが残した問題を解決するためだけに自分たちの時間と労力を費やすのは勿体ない。マイナスをゼロに戻す環境活動はもちろん大事だが、ゼロのものをプラスにしていく夢のある環境活動を考えよう」

語りかけの後、最後に「これから私たちユース世代に何ができるのか?そのために何が必要か?」というテーマでグループごとに話をして会を閉じた。閉会後もホールに残る参加者が多く、ユースミーティングで出会ったメンバーでいくつかの当日ワークショップが組まれた。今はまだユース世代ができることは少ないかもしれないが、清里をきっかけにつながりを深め、10年後、20年後に大きなうねりとなって社会を変えていけるように今後もユースミーティングを続けていきたい。



オプションプログラム

◆環境教育プレゼンテーション

1 日目:11 月 15 日(土) 16:05~18:15 (前半)

20:05~20:50 (後半)

◆早朝ワークショップ

2 日目:11 月 16 日(日) 7:00~8:00

- 朝の楽しい修行:ヨガと勤行
- 環境教育と持続可能な開発の日米比較研究中間報告②
- エンカウンターグループ「今ここ」
- 清里朝散歩

◆当日募集ワークショップ

3 日目:11 月 17 日(月) 9:00~11:30

- ESD フェス・みらい会議(ええじゃないか清泉寮 大作戦)
- 全体会 3 閉会式をプロデュース
- サメと ESD
- この業界でメシを食うために 何ができる? 何をする?
~まずは私たちが持続(メシ食えるように)できるようにしよう~
- 体験しよう、させよう、仲間づくりプログラム体験
- 循環する暮らしを伝える
- 森の女子会(性別不問)
集まれ!山ガール!森ガール!(自称可)
- 馬と耕す暮らしのススメ
- ゲームで生態系を学ぼう
- 小さな海岸の大きな取り組み ~持続可能な地域づくりにみんなで取り組んだ 10 年~
- 平和で元気な関わり方・聴き方
- NGO・大学・企業のベストな手の組み方を考えよう。
- トヨタ白川郷自然学校のプログラム体験!! ~木の実の餅づくり~
- 一枚の羽を翼に。

環境教育プレゼンテーション 1日目(15日) 16:15~20:50

①16:15~

◆自然体験教育のプロフェッショナル養成講座あり

実施者： 山田 俊行（自然学校指導者養成講座全体コーディネータ）

内 容： 自然体験を活用した教育活動のプロを養成する日本でたった一つの講座『自然学校指導者養成講座』。これからの進路を考えている方や、自然体験教育の人材育成担当者の悩み解決に役立つこと間違いなし！現代社会に求められる指導者のイメージや求められるスキル、人づくりのヒントなどがたくさん詰まった講座の魅力を紹介。

◆ソローとエマソンの自然観 ～10分でお話します～

実施者： 柴崎 文一（明治大学）

内 容： ソローの自然思想が、エマソンから影響を受けていたと言う人がいますが、少なくとも『森の生活』以降のソローに、エマソンからの影響は全く見られない。10分間という短い時間で、ソローやエマソンの思想について話をした。

◆高梁川流域学校 ～川を機縁としたコミュニティの形成～

実施者： 岡野 智博（(一社)水辺のユニオン）

内 容： 岡山県西部を流れる一級河川高梁川。その流域の自然、歴史文化、産業などをコンテンツとした高梁川流域学校について、その事業内容についてプレゼンテーションした。

◆土遊びの魅力

実施者： 矢吹 麻弓（国際自然環境アウトドア専門学校 学生）

内 容： 街中の園の土と森の土を比較したり、森の土の魅力について探ったりした。

②16:30~

◆地域に根ざした環境教育（PBE）について

実施者： 水村 賢治（NPO法人エコプラス）

内 容： PBE とはなにか。地域に根ざした環境教育について概要を説明した。

◆元不登校児でしたが、自然学校作っちゃいました！

実施者： 戸高 諒（みんなの学校）

内 容： 元不登校児が代表のみんなの学校。大分県でほめない、しからない、認める教育で誰もが自由になっていく学校「みんなの学校」を立ち上げた。教育に新しい価値観を広めたいと思い活動している。立ち上げのプロセス、理念、大事にしている場作り、今後の展望について紹介した。

◆「安全で正しいナイフの使い方を啓発」 について

実施者： 水谷 理・小林 潤也（ピクトリノックス・ジャパン(株)）

内 容： 危険だからと子どもからナイフを遠ざけるのではなく、実際に道具を手にする機会を重ね、間違った使い方をすればケガをすることも知ることで、刃物類に対する正しい知識と安全な使用方法を学ぶのは貴重な体験だと考える。また、子ども自らナイフを使った工作などを体験する事で、五感の機能を発達させ、いざという時に役立つ知識や技術を習得していく。ワークショップなど体験型の活動を通じ、道具の大切さ、正しい使い方の理解や想像力につながる機会となることを目指している。

◆野外音楽フェス×自然体験！環境教育！！

実施者： 鈴木 幸一（アースガーデン）

小川 結希・村上 友和（(株)自然教育研究センター）

内 容： 野外音楽フェスティバルに行ったことはありますか？そこは自然体験、環境教育の場として絶好のフィールドだと考えている。自然の中で開催されることが多く、自然を観ることに関心が薄い参加者もいて、たくさんの人を対象にできることがその理由。このプレゼンテーションでは、都市公園やキャンプ場などで開催された野外音楽フェスティバルでの取り組みを紹介した。

③16：45～

◆エコエネ体験プロジェクトの概要と、3.5時間WSの紹介

実施者： 藤木 勇光（J-POWER 電源開発(株)）

内 容： エコエネ体験プロジェクトの概要と、3.5時間WSで行う「エネルギー大臣になろう！」の紹介を行った。エネ大臣WSは、エネルギーバランスをテーマに、楽しくコミュニケーションがとれるカードゲームで、各種制約のもと、一国の大臣となって、理想のエネルギー・環境政策を目指す。

◆野外保育の指導者養成 ～アウトドア専門学校の取組～

実施者： 田辺 慎一（国際自然環境アウトドア専門学校）

内 容： 近年盛り上がりを見せている「森のようちえん」や、野外保育、自然保育分野の指導者を育成するためには、どのようなカリキュラムが必要なのか？今年度から野外保育分野の指導者養成を始めた国際自然環境アウトドア専門学校（新潟県、妙高市）の実践事例として、現保育士あるいは幼稚園教諭免許を持つ方を対象とした研究科自然保育専攻（1年制）のカリキュラムや半期（4月～10月）の取組から得られた成果・課題を紹介した。

◆小学生向け園芸プログラム ～土、水、太陽をテーマに～

実施者： 浅岡 みどり（立教大学大学院生）

内 容： 酸素や食糧の供給源である身近な植物。この植物の重要性を、野菜を収穫して食べることを通して体感すると同時に、植物の生長や人間の生活に欠かせない自然環境に目を向け考えるプログラムを実施している。土、水、太陽をテーマに、小学生を対象に行なった大学の公開講座「夏休み子どもプロジェクト」を紹介し、プログラムデザインの内訳と今後の課題について考察した。

◆「決別！倍率神話」双眼鏡・天体望遠鏡 選定ナビ・2

実施者： 中村 照夫（月の会）

内 容： 海外では許されない初心者向け天体望遠鏡セールスでの引っかけフレーズ、超高倍率強調広告。結果、「こんなもんか」と芽生えた興味も終了。良心的メーカーでさえ現状を無視できず自らも高倍率品をラインナップに。初心者へこそ基本的良品を最初に手渡しすることこそが将来の上級者向け製品販売へとつながる。日本のこんな野放し状況が世界に比し天文人口の圧倒的少なさを生む。社会全てが経済優先で。

④17:10~

◆矢並湿地子どもおもしろナビゲーターのおもしろい所

実施者： 猪俣 寛（公財）日本野鳥の会

内容： ラムラール条約登録湿地である矢並湿地の今年の一般公開で、矢並小の子ども達が、今までの環境学習の成果を活かしてガイドに挑戦。そのポイントは、知識の正確さではなく、子供達が「おもしろい」と思ったこと。自然に対する子ども目線のおもしろさを紹介した。

◆アウトドアチャレンジ「野外力検定」

実施者： 小林 孝之助（アウトドアチャレンジ協議会）

内容： 平成21年度より自然体験活動や青少年教育に関わる団体代表者で構成する協議会を設立し、日常的な外あそび習慣の普及を目指し策定した「野外力検定」の仕組みについてパンフレットを配布し説明した。過去5年間の取り組みやイベントとして実施する場合、家庭で友だちや家族と実施する場合など具体例を紹介した。テーマは「家あそびより外あそび、バーチャルよりリアル、ひとりよりみんなで」としている。

◆「協同」による里山再生への取り組み ~〇〇×〇〇~

実施者： 小原 賢二（ホールアース自然学校）

内容： 里山の問題として、放置された人工林や竹林、獣害、耕作放棄地などがある。ホールアース自然学校は「ろうきん森の学校」と共に、10年間里山の問題解決に取り組んできている。里山の問題解決には様々な側面からのアプローチが必要！そこで重要になってくるのが「協同」である。自然学校×木こり×デザイナー。自然学校×NPO団体×職人。自然学校×企業。などなど、私たちが取り組んでいる様々な「協同」による活動を紹介した。

◆「月暦」西暦しか知らないのは環境教育では大損！

実施者： 齊藤 透（月の会・東京）

内容： 思考が暦から大きな影響を受けていることをご存知ですか。西暦（太陽暦）は、明るさ・強さを是とする太陽中心思考のため、大量消費、経済効率優先に至るのは必然。ここいらで別のモノサシも知ってみては如何でしょう。水と生命のサイクルを表す月暦。知らないとおカルト的に見えるが、科学性は太陽暦より上。科学・文化・歴史・風土、万事につながっているので、ファッションの小ネタの宝庫でもある。せつかく日本にいて環境に携わるなら、「西暦しか知らない」のはもったいない。

⑤17:25~

◆インタープリター集団「IP-egg」の活動報告

実施者： 伊藤 由季（都立小峰公園 小峰ビジターセンター）

藤田 和宏（公財）神奈川県公園協会

内容： 私たち IP-egg は、インタープリテーションに関する知識や技術などの相互スキルアップを目的としたグループ。現役インタープリターをはじめ、会社員、学生、アウトドアショップ店員、ホテルマン、造園家、農業従事者など、所属の枠を越えた様々なメンバーがこれまで活動に関わってきた。今回は神奈川県立博物館での企画展示、東京農業大学学生向け講座実施などを中心に、今までの主な取り組みについて紹介した。

◆小学校の総合的な学習の時間で作成したスライドショー

実施者： 河又 彩（白鷗大学学生）

内容： 東京都稲城第一小学校5年生の総合的な学習の時間の森林環境教育プログラムで作成したスライドショーを紹介した。

◆10年で10万人が参加した里山再生プロジェクト!?

実施者： 大武 圭介（ホールアース自然学校）

内 容： ホールアース自然学校が労働金庫連合会（労金連）の支援を受けて、福島・広島のNPOと共に行っている「ろうきん森の学校」。企業とNPOが協働して10年間にわたって継続してきた取り組みと成果を紹介した。なぜ10年間もの長期にわたって支援することになったのか、10年間継続することで地域はどう変わったのか等々、プロジェクトの背景と今後の展望も合わせてお伝えした。

◆がすてなーに ガスの科学館+環境エネルギー館=?

実施者： 嶋野 弥名子（東京ガス がすてなーに ガスの科学館）

内 容： 2014年3月に閉館した「環境エネルギー館」は、インタープリターとともに一部の展示物とプログラムが「がすてなーに ガスの科学館」と統合した。これまで同じ東京ガスの企業館といえども別々に歩んできた両施設、その環境教育とエネルギー教育のノウハウ、総勢32名となったコミュニケーター、ハンズ・オン展示物、学校教育との連携等、さまざまな切り口から現状と今後を紹介した。

⑥17:40~

◆脱車社会へのお誘い

実施者： 小川 かをり（早稲田大学）

内 容： 「♪お手で一つないで 野道を行けばー」こんな童謡のマネをして歩ける道は今の街にはない。狭い歩道は自転車と歩行者がせめぎ合い、歩道もない道路では歩行者は危険にさらされながら一列で、常にあたりを注意しながら歩かなくてはならない。路上で遊ぶ子供の声も聞かれなくなった。私は3人の子育てをしたが、子どもの性にとって交通事故ほど怖いものはなかった。車社会と人間味のある街とは、相反する、私はずっとそう感じてきた。

◆2014PLT コーディネーター会議参加報告

実施者： 佐藤 敬一（東京農工大学）

内 容： 2014年5月19~22日にミシガン州トラバースシティで開催されたProject Learning Tree コーディネーターコンファレンスを紹介した。

◆環境教育プログラムの実施にも教育目的が必要だ!

実施者： 後藤 清史（野たまご環境教育研究所）

内 容： 当たり前のように体験型で実施されるようになった環境教育のプログラム。既存のプログラムでは、様々なプログラム中の体験（アクティビティ）を通じて環境に関わる者としての学びを提供しているが、プログラム自体（含むアクティビティ）の実施目的が明確で、体験が効果的であるため、実施者（指導者）の教育目的が設定され難いのではと。指導していると言いながら、プログラムに流されたプログラムになっていませんか？ファシリテーションやインタープリテーションにも求められるモノなのかも含めて考えた。

◆学校と地域が連携協働したESDの推進に関する一考察

実施者： 坪松 美紗（立教大学大学院生）

内 容： ESD推進に寄与する地域コーディネーターの可能性について発表した。ESD推進にはコーディネーターの必要性が言われているが、制度的担保がないのが現状。現在文科省が推進している学校支援地域本部には地域コーディネーターという役割があり、この地域コーディネーターがESDコーディネーターとしての役割を果たしているのではないかと、という仮説をインタビューと質的データ分析から明らかにした。

◆循環する森林資源を活かす“treesm”とは。

実施者： 佐々木 豊志（(一社)くりこま高原自然学校）

内容： 森林は循環する自然資源。持続可能な地域の資源として有効に活用するためにはこれまでの価値感から大転換をしなければならない。森の入り口から出口までがつながり、「森を育てる」「森を守る」「木を切り出す」「森林資源を活用する」「木材資源から商品をつくる」・・・それぞれの事業がつながることが必要となる。森林資源を巡る事態と大きな問題や課題を知り、その課題に取り組んでいる事例を濃縮してご紹介した。

◆「森のようちえん」でできることってなんだろう？

実施者： 松本 江美子（国際自然環境アウトドア専門学校学生）

内容： 自然環境を守るためには、幼児期の自然体験がどれだけの影響を与えるだろうか。幼児期の子どもに自然と自分たちの暮らしとのつながりの実感は持てるのだろうか。認可保育所で働いていた保育士から見た「森のようちえん」での子どもの姿、可能性について発表した。また、これからの「森のようちえん」のあり方についても提案した。

◆富士山と恩賜林組合

実施者： 堀内 佑太・羽田 修・天野 公貴（富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合）

内容： 吉田恩賜林組合は富士山の麓にあり、富士北麓地域と非常に結びつきが深い団体である。富士山北面の恩賜林組合の管理地や富士山と恩賜林組合のかかわりについて「入会（いりあい）」という概念を含めながら紹介させていただいた。また普段から恩賜林組合ではどのような事業を展開しているのか、その事業が富士山の自然や入会という文化を守るためにどのような役割を果たしているのかについてご紹介した。

◆環境教育と持続可能な開発の日米比較研究中間報告①

実施者： 藤 公晴（青森大学社会学部）

内容： わたしたち環境教育の実践者は、それぞれの現場で「持続可能な開発」とどのように向き合ってきたのでしょうか。現在、青森大学とニューヨーク州立大学の研究チームは「環境教育と持続可能な開発」に関する日米比較研究に取り組んでいる。ここでは、似て異なる両国の環境教育実践者を対象に行ったアンケートの結果について報告した。

◆日本の農水漁村に外国人旅行者を連れて行こう

実施者： 森 高一（日本エコツーリズムセンター(エコセン)）

内容： 日本エコツーリズムセンターでは、今年度農林水産省の事業で、外国人旅行者のグリーンツーリズム地域での受入れ整備を目的としたセミナーや研修、モニターツアーを実施している。インパウンド（外国人の日本国内のツアー）で、日本の地域に滞在交流する旅をつくる地域の事例を紹介し、これからの可能性について考えた。

◆トヨタの森式！伝える手法「ぱたぱた広がる紙しばい」

実施者： 原田 けいこ・原田 秋男・伊吹 あゆみ（トヨタの森）

内容： 「大人にしっかり伝えたいメッセージだけど、子どもたちにもわかりやすく伝えたい」。そんな風に思ったことはありませんか？トヨタの森では大人も子どもも一緒にわかりやすく伝えるための手法として、「ぱたぱた広がる紙しばい」を手づくりしている。様々なテーマやシーンで応用可能！自分バージョンにして活用を！

⑨20 : 20～

◆サステイナブル・ツーリズムってなんだ？

実施者： 梅崎 靖志（風と土の自然学校）

内 容： NPO 法人日本エコツーリズムセンターで取り組む持続可能なツーリズムのための取り組みについて紹介した。持続可能と一言でいっても、どこから何に取り組めばいいのか？エコセンでは、国連世界観光機関（UNWTO）のサステイナブル・ツーリズムの基準である GSTC の日本への導入を念頭に今年度から取り組みを始めている。その取り組みについてコンパクトに紹介させていただいた。

◆ハワイ州オアフ島ハナウマベイの事例研究

実施者： 松岡 宏明（立教大学大学院生）

内 容： 近年、世界自然遺産や自然を有する国立公園に訪れる観光客の倫理を問い、それらを問い直すような記事が多く見受けられる。観光地が抱える問題は多く、このような諸問題の議論は急務であると考え。ハワイ州オアフ島にある自然保護区ハナウマベイは観光客に人気の高いビーチで、そこでは観光客に対し環境教育を行い、ビーチの生態系を保持している。ハナウマベイの事例発表とともに、これから観光地はどのような場所に成らなければならないのかをこの事例から考察した。

◆選択できる未来を目指して

実施者： 芦田 梢（麻布大学学生）

内 容： 自分自身（大学生）が行なってきたこれまでの活動紹介を踏まえ、なぜ「選択できる未来」を目指しているのか。それに向かってどのようなものが必要かを考えていく。大学に入学してから環境教育という世界に魅了され、森林体験活動・企業との連携・神奈川県相模原市での個人活動・そして様々な人との出会いを通して何を学び、考え、これからを生きるのか。3年間で振り返り発表した。

⑩20 : 35～

◆企業における参加体験型環境教育を導入する意義

実施者： 廖 奕琦（立教大学大学院生）

内 容： CSR プームと言われる現代日本の企業に対しては、本業の製品であれ、社会貢献活動であれ、環境との深い関わりがあるが、社外のステークホルダー向けの活動(教育)が多い。一方、社内向けの環境教育を実施する必要があるか？社員向けの参加体験型環境教育を導入することは一体どんな意義がある？という疑問を持ち、社内で環境教育を導入する企業の中に、J-POWER 電源開発株式会社を研究対象者として、インタビューとアンケート調査を実施し、調査結果を報告致した。

◆地域に根ざした ESD 環境教育プログラムを作る

実施者： 中山 孝志（環境省 平成 26 年度持続可能な地域づくりを担う人材育成事業・山梨）
川村 研治（地域ワーキンググループ）

内 容： 環境省は、文部科学省の協力の下「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」の一環として、ESD の視点を取り入れた環境教育プログラムを作成し、全国 47 の都道府県において、地域の特性を活かしたプログラムへと改良しながら、学校現場等での実証事業を行った。平成 25 年度に関東ブロック 1 都 9 県（茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・新潟県・山梨県・静岡県）で実施した事業のねらい・内容・成果と課題を報告した。

早朝ワークショップ

2日目(16日) 7:00~8:00

◆朝の楽しい修行:ヨガと勤行

実施者：中野 民夫 (同志社大学)

「みんなの楽しい修行：より納得できる人生と社会のために」の著者でもある中野民夫氏の指導のもと、朝日に向かい、1. 正座・呼吸、2. AUM、3. 天と地とつながる、4. 太陽礼拝のヨガ(スーリヤナマスカル)、5. AUM、6. 勤行、7. 座禅、8. キャンティンブを順番に実施した。参加者は神秘的な空間のなかで、体→呼吸→心を順番に整えていき、最後はすっきりとした表情で朝の楽しい修行を終えた。



◆環境教育と持続可能な開発の日米比較研究中間報告②

実施者：藤 公晴 (青森大学社会学部)

WEB アンケート作成ツール：SurveyMonkey を使い、日米の環境教育実践者を対象にSDに関する意識・実践のアンケートを行い、その結果を比較した。SD、ESDの定義づけには日米の差は見えにくかったが、実践に関する設問を掘り下げていくにつれ、違いが感じられた。まだ数値上の比較でしかないので、今後はさらに詳細を分析し、学会等で進捗を発表していく予定。参加者はデータを見ながら、積極的に質問を投げかけ、実施者と参加者がやりとりしながら進められた。



◆エンカウンターグループ「今ここ」

実施者：戸高 諒(みんなの学校)

心理学の手法を用いて参加者どうしが「今ここ」で感じていることを語り合うワークショップ。実施者の戸高氏は、子どもたちとキャンプをするときも感じていることを伝えあう時間を大切にしているとのこと。

朝のまぶしい日差しが差し込む部屋の中で、ぼつりぼつりと参加者たちが自分の思いを語っていく。誰もが語り手であり、聴き手にもなれる。誰も口を開かず沈黙が続く時間もあつたが、それがまた参加者にとっては自分を見つめる時間になったようだ。



◆清里朝散歩

実施者：古屋 真東 ((公財)キープ協会 実習生)

早朝の澄んだ美しい景色を楽しみながら、晩秋の森を散策するワークショップ。朝7時、霜が1.5センチも降りた大地を踏みしめながら32名の参加者と散歩を楽しむ。気温は-3度、冷えていく手先足先をほぐす様に準備運動を済ませ深く深呼吸。森に進むと自然からのギフトが。ヨモギ、笹、そしてモミの木。順番に手に取りアロマを楽しみ、その効用を学んだ。一番人気はモミの木。“寒かったけど来てよかった”そんな声を聞きながら清里の素の自然を楽しむ事ができた。



当日募集ワークショップ

3 日目(17日) 9:00~11:30

◆ESD フェス・みらい会議 (ええじゃないか清泉寮 大作戦)

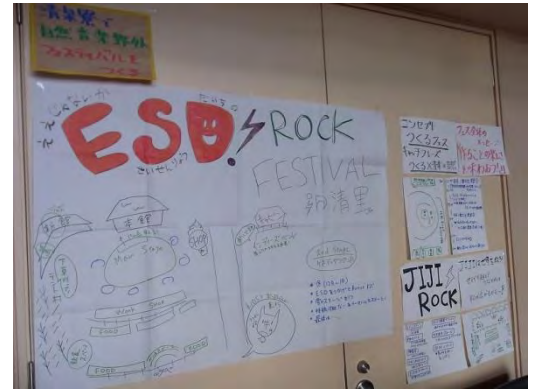
実施者：鈴木 幸一 (アースガーデン)

川嶋 直 ((公社)日本環境教育フォーラム)

飯島 邦子 (PROCES Laboratory)

小川 結希・村上 友和 ((株)自然教育研究センター)

フェスという一見関係のない場を ESD に繋ぎ人々を巻き込んでいける、という仮説を出発点に、「えんたくん」を活用したワールドカフェ方式の対話を行い、ESD に気づいていない人・知らない人とつながる新たな「手法」について語り合った。その中では、今回の清里ミーティングで各自が持った「ESD」に対してのもやもやを共有しながらも、対話をかさねていく中で、各々のやりたいことが明確化され、様々なアイデアが生まれた。最終的には「もし清里でやるとしたらどんなことができそうか」という具体的なプランを出し合う場となった。



◆全体会3・閉校式をプロデュース

実施者：森 高一 (NPO 法人エコツーリズムセンター)

山田 俊行 (トヨタ白川郷自然学校)

清里ミーティングの閉会式を、当日直前に企画するワークショップ。ヒントを探しに全てのワークショップ会場へ足を運び、その後ワークメンバーとともにプレストを重ねた。最後はリラックスをして終わろうと意見がまとまり、昨年到现在で全員で屋外に出るのコミュニケーションに決定。実際の閉校式もワークメンバーで進行した。○×質問で3日間をふりかえっての気持ちを聞き、後半はフリーにグループを作っての雑談に。最後に全員で記念撮影を行った。



◆サメとESD

実施者：沼口 麻子 (シャークジャーナリスト)

参加者のシャークビリティを上げるクイズからはじまり、実体験をもとにした話を中心に進め、参加者をサメの世界に引き込んでいった。サメの種・種ごとの特性・サメの利用など、サメに関して様々なテーマでお話しいただいた。参加者の質問の時間が長かったが、丁寧に疑問に答えていただいた。その後の参加者同士のディスカッションは「ESD への活かし方・サメをESDにするには？」というテーマで行われ、サメの利用と活用の話からサメと人との付き合い方、自然との付き合い方のテーマになるなど、参加者間で活発な議論が交わされた。



◆この業界でメシを食うために 何ができる？ 何をする？

～まずは私たちが持続(メシ)食えるようにできるようにしよう～

実施者：石井 雄也 ((一財)自然公園財団)

水村 賢治 (NPO 法人エコプラス)

持続可能な社会をつくる前に、まずは環境教育の業界の私達自身の生活が、持続できる(メシを食える)様にしなければならないのではないかとテーマにディスカッションを行う。「なぜ食えないのか、その原因は何か」を考えた際、「サービスはタダという誤解がある」「経営の視点が欠けている」「目に見えないものにどう価値を置くか」等、様々な意見が発表された。今後の展望として、清里ミーティングにおいて行政や学生や企業など様々な分野の人とつながり、新しい商品を作れるようなアイデアを共有し、行動につなげて行くことが大事だと確認した。



◆体験しよう、させよう、仲間づくりプログラム体験

実施者：後藤 清史（野たまご環境教育研究所）
佐藤 敬一（東京農工大学）

自然体験プログラム等で最初に行うアイスブレイキングを実際にやってみようというワークショップ。実施者だけではなく参加者も自身の経験を元にアイスブレイキングの案を出し合い、子どもから大人まで楽しめるアイスブレイキングの手法を、身体や生物多様性に関するカードを使って、“楽しみながら”学ぶことができた。そこにあったはずの参加者間の氷は既に溶けていた。



◆循環する暮らしを伝える

実施者：加藤 大吾（NPO 法人都留環境フォーラム）

実施者が山梨に移り住んでから8年、どのような暮らしをしてきたか体験談を交えつつ、循環する暮らしの大切さやすばらしさを教わった。畑や田んぼで一切農薬を使わずに食物を育てることにより、体に良い物が採れるだけでなく、昆虫のすみかになり生物多様性にもつながっていくのである。循環している瞬間を感じる時が一番幸せであると実施者が言っていたが、難しいことではなく、ひとつひとつはじめていけば誰でもできることであり、循環する暮らしを今後目指している人たちに希望を与えるワークショップであった。



◆森の女子会(性別不問)

集まれ！山ガール！森ガール！（自称可）

実施者：坪松 美紗（立教大学大学院生）

澁谷 涼子（自然学校指導者養成講座15期受講生）

谷口 哲郎（岩木山自然学校）

伊吹 あゆみ（トヨタの森）

暖炉を囲みながら、まるで本当の女子会のようにおしゃべりを楽しむ感覚でスタートした。まずは自己紹介を兼ねて、今回の清里でゲットしたこと、私と森の関係、森でしてみたいことなどについて各々考え、話をした。つづいて、20代30代の女子が参加したいと思えるような森におけるプログラムは何なのかについて話し合いをした。みんなが共感したキーワードは、おいしいごはんやゆったりした時間など、やはり女子ならではの声であった。堅い空気ではなく、終始参加者が自由に話をできる空間だったからこそ、様々な発想が生まれる会となった。



◆馬と耕す暮らしのススメ

実施者：岩田 和明（NPO 法人都留環境フォーラム）

身近な暮らしの中で持続可能性を実際に体験できる環境教育として、馬で田畑を耕す「馬耕」について取り組み始めた活動を紹介した。畜力を利用した暮らしは、古い文化を継承するという意味でのみ取り上げているのではなく、石油を使用しない自立した暮らしや食の生産として、また循環型の農業として、これから取り組むべき暮らしの提案である。今回は馬耕道具を使い、馬の気持ちになって、重いものを運ぶ馬力、手綱で馬に指示を伝達する技術を体験してもらい、「馬があなたの職場にいたら、どう活かすか？」を共に考えた。



◆ゲームで生態系を学ぼう

実施者：奥宮 健太 (BEANS BEE)

みんなが難しく感じる生態系、生き物、生物多様性についてボードゲームを使って学ぶ。今回のゲームでは、オギ、コバネイナゴ、モズ、ヤマトシジミ、シロツメクサの生き物のコマを使う。それぞれの生き物には、生き残りの条件があり、参加者は、その条件の中で、生き物のコマを動かして増やしていく。ゲームの中で、いずれかの生き物が増殖すれば、他の生き物が減少する現象がみられ、食物連鎖などの生態系のしくみが学べる。



◆小さな海岸の大きな取り組み

～持続可能な地域づくりにみんなで取り組んだ10年～

実施者：浜本 奈鼓 (くすの木自然館)

2012年3月に国立公園に指定された鹿児島県始良市の重富海岸。かつては荒れ果て、見捨てられていた海岸を、地域の人たちとともに再生させた10年間の記録をお話しいただいた。まさに持続可能な地域づくりの成功例のうちのひとつである。

実施者が代表をつとめるNPO法人くすの木自然館の手によって豊かな生物多様性を取り戻し、多くの人々の環境学習の場にもなった重富海岸の様子を、たくさんの写真やエピソードを交えてお話しいただいた。

「優先すべきは地域の利益、尊重すべきは地域の個性」という実施者の言葉にあるように、地域の特色を生かし、地域に根ざした環境学習を行うということに、強く共感を覚えた。



◆平和で元気な関わり方・聴き方

実施者：戸高 諒 (みんなの学校)

最初に実施者から、もし「わかめが食べられない子どもがいたらどうする？」という事例を与えられた。参加者が2人一組になり、わかめが食べられない子ども、食べさせたい指導者になりきり、やり取りをした。実施中は照れ笑い禁止で、各自もし自分がその立場だったらということを考えた。実際に、なりきる事でこういうアプローチをされると嬉しい、これだと悲しいと実感する事が出来た。嬉しい事、辛い事、悲しい事、怒り、すべて含んで人間であり、人間らしいということが理解できた。参加者の経験も踏まえ、各々の考えを共有した。



◆NGO・大学・企業のベストな手の組み方を考えよう。

実施者：中村 敬 (経団連自然保護協議会)

ESD 推進に対して、大学・企業・NGO からの各参加者が、3つの組織体の強み・弱みと思うものを各々で表にして書き出し、その理由を各自が説明する中で、意見交換や質疑応答を行った。その議論をもとに、各組織がどう協働していくのがベストかを話し合ったが、普段オフィシャルにはあまり語られない、それぞれの組織体が裏に抱える悩みや課題の理解も広がり、その課題を補うような相互連携が今後必要であるという気づきの場となった。



◆トヨタ白川郷自然学校のプログラム体験！！

～木の実の餅づくり～

実施者：トヨタ白川郷自然学校

白川郷の冬の主食は餅である。30年程前の白川郷で食されていた餅は、現代の代表的な米だけで作られた白い餅とは違い、きびや粟、トチの実を混ぜ込んだ餅だった。現在80代のおばあさんのインタビュー動画を見ながら当時の餅づくりについて学び、実際にトチの実を使った餅づくりを体験、実食した。その後、参加者全員で、白川郷の餅とどのような「地域に残る知恵」が自分たちの地域にはあるかについて意見交換を行った。古き良き地元の知恵がなくなってしまうのを危惧し、今回のワークショップのような生きた形で受け継ぎたいと、実施者の一人である岩田さんが締めくくり、本ワークショップは終了した。



◆一枚の羽を翼に。

実施者：佐原 かつり（埼玉県傷病野生鳥獣保護ボランティア）

参加者はまず、自分のイメージする羽根を描き、グループごと本物の羽根を観察、左右二枚の翼を作っていった。完成後は、それぞれの推理発表の時間。参加者からは、「鳥の翼は、人間の腕と同じように大きく分けて3つの部位に分かれているが、それぞれの比率は人間と異なっているんだ」「羽根が一枚ずつずれて重なっていることで、空気を逃がさないのか」等、じっくりと羽に向き合ったからこそ見えてくる発見が多く聞かれた。「今回出た新たな疑問は、ぜひ自分の目で確かめてほしい」という実施者の言葉でワークショップを終えた。



3 日目

全体会 3・閉会式

全体会3では、最後はリラックスして終わろうという目的の下、今年も参加者全員が屋外の牧草地へ出てのコミュニケーションをすることになった。

まずは、以下のような〇×質問で3日間をふりかえっての参加者の気持ちを聞いた。

Q1：3日間の清里ミーティングでたくさんの人と話が出来たと思います。来る前と比べてスッキリしましたか。

Q2：参加費の元は取れましたか。

Q3：まだまだ話し足りないですか。

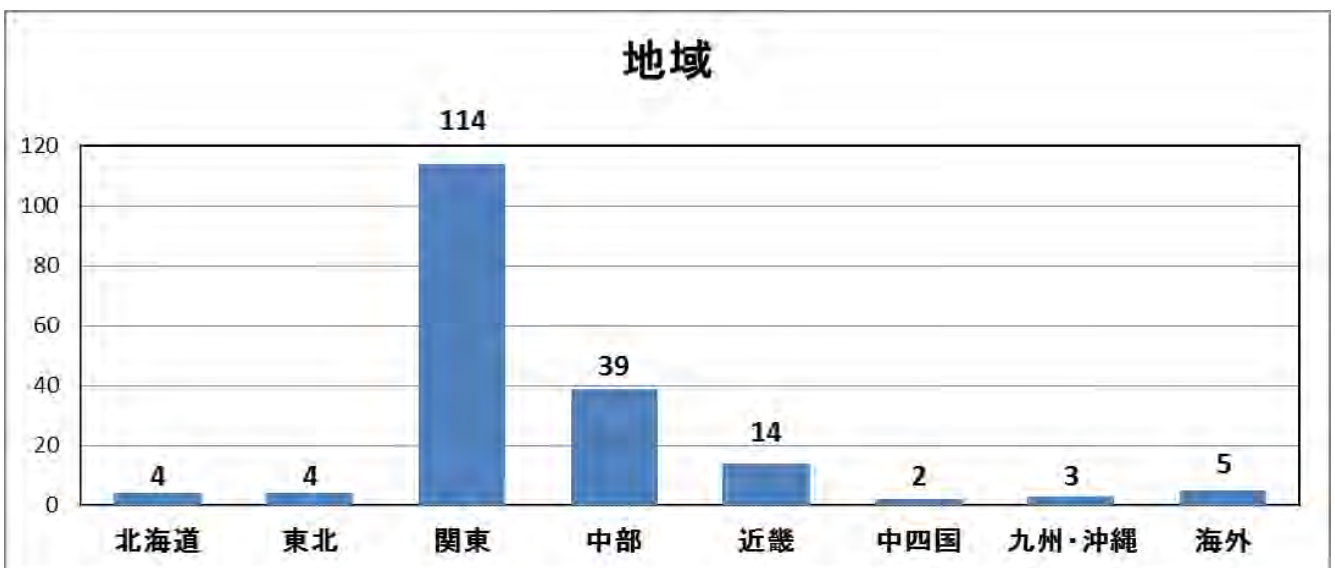
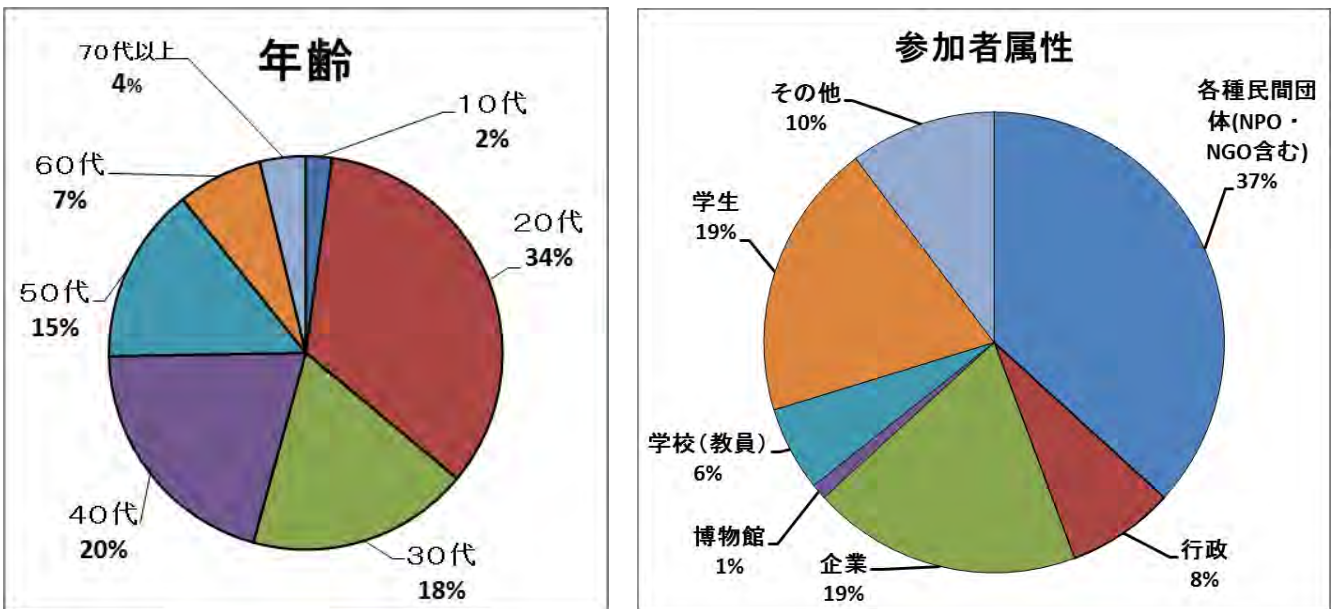
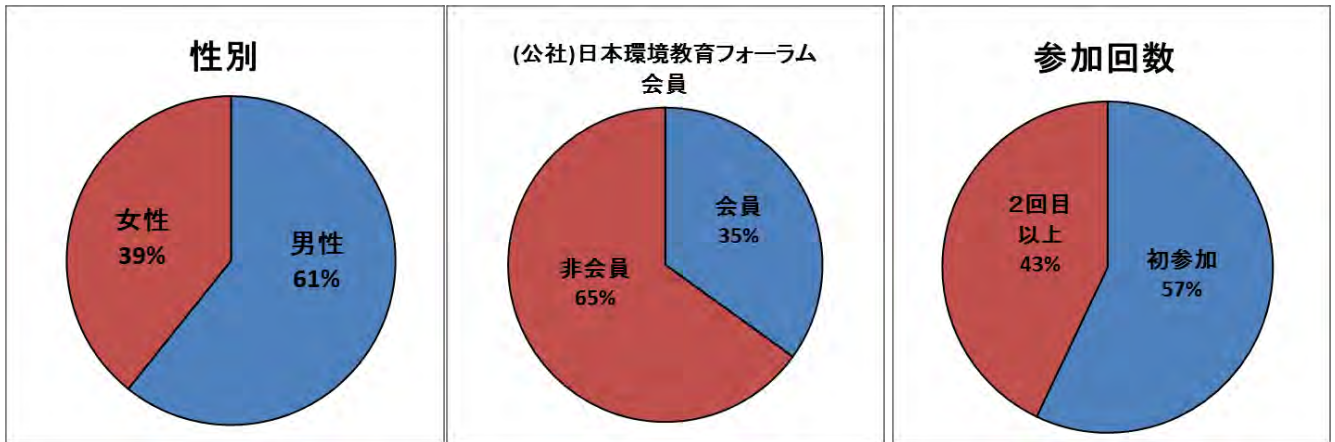
〇×質問に引き続き、まだまだ話し足りない、この人と名刺交換したいという人とフリーにグループを作っての雑談タイム。秋の清里の空気の中、思い思いの場所にシートを広げ、それぞれのグループでの時間を過ごした。

そのまま屋外で全体での集合写真を撮った後は、清泉寮新館レストランに移動してのさよならパーティー。ビュッフェ形式での食事をしながら、参加者同士での最後のコミュニケーションの場となった。



参加者データ

～データに見る清里ミーティング 2014～



スタッフ名簿

※企画委員兼任のスタッフには所属右端に

㊦ マークを入れています。

氏名	所属
加藤 超大	(公社)日本環境教育フォーラム
金久保 優子	(公社)日本環境教育フォーラム ㊦
鴨川 光	(公社)日本環境教育フォーラム
京極 徹	(公社)日本環境教育フォーラム
小堀 武信	(公社)日本環境教育フォーラム
柴原 みどり	(公社)日本環境教育フォーラム
瀬尾 隆史	(公社)日本環境教育フォーラム ㊦
垂水 恵美子	(公社)日本環境教育フォーラム
中地 愛	(公社)日本環境教育フォーラム
饗場 葉留果	(公財)キープ協会
伊澤 菜美子	(公財)キープ協会
石川 千春	(公財)キープ協会
石川 昌稔	(公財)キープ協会 ㊦
岩渕 真奈美	(公財)キープ協会
小野 明子	(公財)キープ協会
川村 悦子	(公財)キープ協会
佐藤 陽介	(公財)キープ協会
関根 健吾	(公財)キープ協会
高木 恭子	(公財)キープ協会
田村 のり子	(公財)キープ協会
鳥屋尾 健	(公財)キープ協会
中島 舞佳	(公財)キープ協会
中山 孝志	(公財)キープ協会
古屋 真東	(公財)キープ協会
本田 晶	(公財)キープ協会
増田 直広	(公財)キープ協会
村山 敬洋	(公財)キープ協会
本杉 美記野	(公財)キープ協会
山田 木綿子	(公財)キープ協会
山本 淳晴	(公財)キープ協会

(団体別 50 音順)



清里ミーティングの仕掛け人 企画委員
(公社)日本環境教育フォーラム 川嶋 直

企画委員名簿

氏名	所属
星野 智子	(一社)環境パートナーシップ会議
村上 千里	NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議
森 高一	NPO 法人日本エコツーリズムセンター
山田 俊行	NPO 法人白川郷自然共生フォーラム

(50 音順)

ボランティアスタッフ名簿

氏名	所属
一場 雄樹	都留文科大学
伊東 絵里子	早稲田大学大学院
井上 健太郎	森の学舎
岩崎 美紗子	立教大学
鎌田 瑞菜	都留文科大学
釜谷 優太	麻布大学
川嶋 ふみ	石川県立大学
串田 大亮	東京都市大学
久米 由佳	東京都市大学
須藤 清之助	立教大学
堤 麻子	立教大学
豊方 理英	立教大学
納谷 海地	首都大学東京
早川 知都	麻布大学
藤本 亜子	JICA 青年海外協力隊(コスタリカ)
森 花音	津田塾大学
森田 茉莉子	立教大学
遊佐 陵汰	立教大学
吉田 有希	玉川大学
若林 真希	立教大学

(50 音順)



清里ミーティング 2014 を支えてくれた キープ協会&ボランティアスタッフの皆さん
ありがとうございました！！

清里ミーティング 2014 報告書

発行者：公益社団法人日本環境教育フォーラム

※この報告書および清里ミーティングに関するお問い合わせは下記まで。

〒160-0022

東京都新宿区新宿 5-10-15 ツインズ新宿ビル 4F

公益社団法人日本環境教育フォーラム

TEL : 03-3350-6770 FAX : 03-3350-7818

URL : <http://www.jeef.or.jp/>